

2009年度

修士論文

(演習科目 児童福祉研究演習)

(指導教員 中谷茂一准教授)

父親の子育て参加意識を高める社会教育プログラムの考察
～参与観察による評価研究～

聖学院大学大学院

人間福祉学研究科（修士課程）

学籍番号 108MW002 名前 神田雅貴

目 次

I はじめに ー研究目的と問題の所在ー	2
II 研究の背景	5
1. 日本型生涯学習パラダイム転換の必要性	5
2. 父親の育児に関する先行研究	6
3. 意識変容の学習に関する先行研究	8
4. 理論枠組みを用いたプログラムデザインおよび評価の必要性	10
III 方法と対象	11
1. 調査概要	11
2. プログラムデザインの理論的枠組み	11
1) 理論的枠組み	11
2) 具体的なプログラムデザイン	13
3) 第1回目プログラムおよび第2回目プログラム内容および改善点について	13
3. データ収集	22
1) インタビュー方法	22
2) 倫理的配慮	26
3) インタビュー対象者の属性	27
4) データ分析の方法	28
IV 結果と考察	31
1. 結果提示の説明	31
2. ストーリーライン	31
3. 結果図	33
4. 結果の全体像に	34
V 結論	48
1. まとめ	48
2. 今後の展望	49
謝辞	50
引用文献・注、参考文献	50
資料	
父子キャンプにおける父親の子育て学習ガイド	56
プログラムモデル	57
分析ワークシート	59

I はじめに ー研究目的と問題の所在ー

本研究は、「父親の子育て参加意識変容に効果的な学習プログラム」をデザイン・実施し、その参加者の時系列的な意識・行動変化のプロセスを明らかにすることで、意識変容に効果的な学習プログラムを検証するものである。

さて、父親が子育て参加することは子ども、父、母の3者にとって、これまでの研究で望ましいことが論じられている。¹⁾ 子どもにとって、父親の関わりが子どもの発達にプラスの影響を与えること²⁾、母親にとって、育児不安を軽減すること³⁾、父親自身にとって、子育ては男性の人間性の回復⁴⁾や父親の人格的成長にとって望ましいこと⁵⁾が述べられている。

しかし、落合(1994)によると、家族史の研究では、近代化によって、父親が仕事をし、母親が家族を守るという家族モデル(近代家族)が社会に広まり、それまで子育てに関わることのあった父親は、程度の差はあるが生活費を得るといった面を除き、子育てに関与しなくなっていった。⁶⁾

社会生活基本調査(2008)によると、わが国の父親の子育ての現状は、就学前の子どもをもつ父親の育児に費やす時間は1日あたり平均31分であるのに対して、母親は3時間1分となっている⁷⁾。これは、家庭教育に関する国際比較調査(2005)で指摘されているとおり、他の国と比較しても、母親が育児の多くを担っているのがわが国の特徴である⁷⁾。このように、近代以降、日本の父親は、生活費を得る面を除き子育てに関わってきたとは言い難い状況である。

さらに、松田(2008)は父親の子育て参加が今になって求められるようになってきた背景について以下のとおり理由を述べている。⁹⁾

第1の理由は、時代を経るにつれ、子どもの身の回りの世話をする支え手が弱くなったことである。現在の育児期の家族の大半は核家族で、世帯外にいる支え手は親族では祖父母ときょうだいである。近隣の支え合いが希薄になり、きょうだいの数が2～3人と少なく、かつ親族が離れて暮らすことも多いため、かつてのような親族からの手厚い育児サポートを受けることができなくなった。そのため、これまで子育て参加が少なかった父親に、育児の支える力が手薄になった分を補うことが求められるようになっている。

第2の理由は、共働き夫婦の増加である。女性の社会進出の意識の高まりや、不況にともなう男性の賃金低下により、就労する女性は増えている。共働き夫婦の増加により、父

親が家事育児を行う必要性が高まっている。

第3の理由は、母親の育児不安の高まりである。周囲の誰からも支えがない状態では、母親は孤立し、育児不安は高まる。男性の育児参加は子育て不安の軽減と関係がある。

第4の理由は、少子化対策としてである。少子化による問題は労働人口の減少、社会保障制度の維持が困難、経済活動の停滞、異年齢の子どもとの交流が減り社会性が育ちにくくなるなどがあげられている。2008年のわが国の合計特殊出生率は1.37であり、国の人口を維持する2.1にはほど遠い状況が長い期間にわたり続いている。

このような状況下で男性の子育て参加に向けた政策が展開されている。1999年9月に施行された「男女協同参画社会基本法」第6条「家庭生活における活動と他の活動の両立」には、「男女協同参画社会の形成には、家族を構成する男女が、相互の協力と社会の支援の下に、子の養育、(中略)について家族の一員としての役割を円滑に果たし、(以降略)」と定められ、父親の家庭での役割は理念のレベルではすでに定着している。

また、厚生労働省は1999年に「少子化対策推進基本方針」と「新エンゼルプラン(「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について」)」の発表に続き、2001年に「仕事と子育ての両立支援策について」を閣議決定し、2002年に「少子化対策プラスワン」を発表した。この「少子化対策プラスワン」は少子化の原因を未婚化・晩婚化であるというそれまでの位置づけに加えて、夫婦間の子どもの数の減少も原因であるとして、少子化対策の転換が求められたものである。従来の少子化対策は「子育てと仕事の両立支援」や保育関連事業を中心に母親の仕事と家庭の両立に主眼が置かれていた。しかし、2000年代に入ると、それに加え男性を含めた働き方の見直しと地域での子育て支援等に重点を移行した。この仕事と家庭の調和という視点は、2004年の「子ども子育て応援プラン(少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について)」において、「仕事と生活の調和キャンペーンの推進」に引き継がれることになる。

このように父親の育児参加を促すには、子育て期の男性の長時間労働を是正することが何よりも必要であると指摘されている¹⁰⁾。しかし、現在子育てをしている親は、父親が仕事をし、母親が家族を守るという家族モデル(近代家族)の中で幼少期を過ごしており、子育てを積極的にする父親が身近には多くいなかったはずである。そのため、子育てに積極的な父親のモデルを体験することなく親になった。このことから、父親が親になるために、親になることを学習する機会の積み重ねが必要である。そのためにも、宮坂(2008)によると父親の育児支援はこれからもっと必要とされるとしている。¹¹⁾ さらに、家庭教育

に関する国際比較調査（2005）では、親になる前に子どもの世話の仕方の学習をしたかについて（複数回答）、日本では「育児の本を読んだ」が3割、「親から教えてもらった」と「親戚や知人の子どもの世話をした」が2割で、アメリカやフランスと比較して育児書中心で体験の少なさが目立った。また、スウェーデンでは、「地域の学級・講座に参加した」「学校の授業で学んだ」がそれぞれ2割弱の回答があり公的な学習機会があるのが特徴である。また、日本の平均回答項目数は前回の1994年の調査時に比べ、1.84から1.36へ減少しており、親になるための学習環境はますます乏しくなっていることが分かる。そのような日本の状況に対し、スウェーデンやアメリカの平均項目回答数は2.27と2.28であり、¹²⁾ 今後いかに父親が子育てについて学習する機会を確保していくかが課題である。

Ⅱ 研究の背景

1. 日本型生涯学習パラダイム転換の必要性

わが国では教育問題を論じる場合、教育分野の呼び方として社会教育、学校教育、家庭教育という3分野に分けた言い方をすることが多い。¹³⁾ 社会教育法第2条は社会教育の定義として、「この法律で「社会教育」とは、学校教育法（1947）に基づき、学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）をいう。」と定めている。これは、行政が対象とする社会教育の範囲を定めたものであり、狭義の社会教育の定義と言われている。また、教育基本法においては、教育分野を第6条（学校教育）、第10条（家庭教育）、第12条（社会教育）と3つの条文を置いている。第12条については、「個人の要望や社会の要請にこたえ、社会において行われる教育は、国及び地方公共団体によって奨励されなければならない。」となっている。

この「個人の要望や社会の要請にこたえる」という個所は、平成18年の改正前の社会教育の条文において、「家庭教育及び勤労の場所その他社会において行われる教育」となっていた。平成16年の生涯学習審議会答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興」では、今後の生涯学習振興方策の基本方針として『「個人の需要」と「社会の要請」のバランス』を考慮した学習の必要性を述べている。このような背景には、社会教育現場において、個人的な興味、希望を満たすための趣味・けいこごとの講座に偏り、変化し続ける社会に対応するための学習が欠如しがちな実情がある。

社会教育基本調査（2005）によると公民館の講座数では「教養の向上」が61.7%で最も多く、次いで「体育・レクリエーション」が12.6%、「家庭教育・家庭生活」が9.6%となっている。¹⁴⁾ また、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2002）によると、公民館の学級・講座数は、「趣味・けいこごと」が30.0%で最も多く、次いで「一般教養」22.0%、「家庭教育・家庭生活」21.0%の順になっている。¹⁵⁾ 「家庭教育・家庭生活」の割合が全体の2割と多いが、その中には育児、健康、介護・看護といった生活に密着した講座もあるが、料理、ガーデニング、着付け、自然観察の趣味的な要素が強い内容が含まれての結果である。また、全講座数（46,507件）に対しての「育児・保育・しつけ」は2,278件で4.9%でしかない。

これらの結果をみると、趣味・けいこごとを含む教養に関する講座・学級が数多く提供

されていることがわかる。趣味・けいこごとの講座自体は個人の生きがい作りという意義はあるが、その分野に偏りが大きいことが問題なのである。岡本（2003）によると、生涯学習の「日本モデル」では「心の豊かさ」や「生きがい」のための「余暇活動的な学習活動」が主たる政策ターゲットになっている。これは、「学習活動による高齢者の生きがい対策」といった日本独自の生涯学習に対する視点やアプローチと無関係とは言えない。

一方、西欧では生涯学習振興を以下の3つのモデルに分類されている。「西欧モデル」は経済的な目的のための「労働者継続教育モデル」が政策ターゲットで、「途上国モデル」は基礎教育の修了率が低い状況に対応し、成人についても「識字教育」や「基礎的職業教育」を主たる政策ターゲットとしている。¹⁶⁾

2000年の東京におけるG8教育大臣会議議長サマリーで、生涯学習は国際的にも変化の激しいこれからの社会における流動性のパスポートとされた。つまり、社会構造が短いスパンで変化し続ける現代社会において、人びとが子どもの時代に、前の世代から受け継いだ知識や価値観では豊かな生涯を送ることができない時代になっている。山本（2007）は、このような現状をふまえ、生きがい追求のための生涯学習から、変化の激しい時代を生き抜くための資質・能力の開発・伸長に必要な生涯学習が求められていると述べており¹⁷⁾、そのパラダイム変換が求められているのである。

2. 父親の育児に関する先行研究

幼少期の親子関係については家族社会学や発達心理学において多くの研究がなされてきた。それらの研究は1970年代頃までは、ある共通した視点のもとで行なわれてきた。

1つ目の視点は、柏木（1996）によると、「親は子どもに一方的に影響を与える存在である」というものである。この視点では親は子ども発達に影響をあたえる要因の一つに位置づけられ、子どもにとって親の養育行動がどのような意味を持つか繰り返し研究された。しかし親の側に焦点をあてて「親にとって子どもを育てるということはどういうことか」問われることはほとんどなかった。

2つ目の視点は、「幼少期の親子関係において重要なのは母子関係である」というものである。この当時の研究で親子関係、とくに乳幼児期の親子関係という場合の「親」は、ほとんどの場合「母親」を意味した。¹⁸⁾ 山根（2000）によれば、親子関係研究において「父親は不在」だったのである。¹⁹⁾ このような母子関係に偏った研究がおこなわれていた背景には、育児を母親の本能とする考え方に基づくものがあつた。

しかしながら 1980 年代に入ると、「幼少期の親子関係において重要なのは母子関係である」という考え方に疑問を投げかける研究が現れた。それは牧野（1982）による育児不安についての研究である。この研究によって育児は金銭的報酬こそ支払われないが「労働」と呼べる行為であり、不適切な環境でおこなうと過労やストレスを引き起こすこと、また「本能」として本来備わっているものではなく、「学習」するものであることが示された。²⁰⁾ これらのことから、山根（2000）は、育児は夫や家族以外の人びととの多様な人間関係があつてはじめて成り立つということや、母親が子どもにつきっきりで育児することは理想的なことではなく、むしろ子どもと離れる機会を持つ方が良い面もあるということが明らかになった。²¹⁾

このような育児不安の研究を契機にして、母親以外の育児の多様な担い手に関心が向けられるようになった。それらの中で特に注目されたのが、「父親の育児」である。父親の育児の研究については、以下の 2 つの視点から行われてきた。

1 つ目は父親の育児が子どもの発達にどのような影響を与えるかという視点である。社会学において 1950～1960 年代にパーソンズ（Persons）が子どもの社会化における父親の役割について論じた。彼によると家庭や社会において男性は集団的役割、女性は表出的役割を果たすことが求められており、子どもの性別に応じて社会化される必要がある。男の子の社会化において、父親はその役割モデルとして重要であると論じた。また、近年の父親についての研究に直接的な影響を与えたのは、発達心理学のラム（Lamb）の研究である。²²⁾ 彼は父親を「子どもの発達へのもう 1 つの貢献者にあるにもかかわらず忘れられていた存在」であり、「親としての父親の再発見」が必要であると論じた。このような傾向は日本においても著しく、中野（1996）は発達の度合いが高い子どもは父親と良く遊ぶ傾向があることを明らかにした。²³⁾ さらに、父親が「自分のことより子どもの世話を優先」したり、「子の言いなりにならない」、「してはいけないことを教える」といったしつけ行動をとることも、部分的に、子どもの発達と相関があつた。このような研究は身体を使う遊びは父親ならではのものであり、同時に世話役割は母親ならではのことも強調しかねない面がある。つまり、「性別役割分業をしている父母がそろった家族」という特定の家族の在り方を望ましいとし、それ以外を排除することになりかねない。²⁴⁾ そこで、近年では養育者が誰であれ、子どもの発達に重要な養育・保育の質とは何かを探究するといった方向で研究がおこなわれるようになった。

2 つ目の視点は、育児をすることが父親自身の発達にどのような影響を与えるかという

関心である。幼稚園・小学校・中学校の保護者を対象にした牧野（1996）の調査によると、父親が「おむつを替える・しつけをする・相談相手になる・本を読んであげる」といった、手間がかかったり、精神的緊張を伴う育児をすることは、父親の「親としての自覚」や「人間としての成熟」にプラス効果を与えることがわかった。さらに、これらの育児は「ストレス」を高めることはなかった。しかし、同じ育児でも「風呂に入れる」「一緒に遊ぶ」といった楽しい育児や、「子どもが病気の時の看病」といった一時的な育児は「親としての自覚」や「人間としての成熟を高める」という効果はほとんどなかったことを論じている。²⁵⁾ さらに、中野（1996）によると、父子あそびが多い子どもは情緒性、社会性、自発性などの発達度²⁶⁾高いこと、あるいは小野寺(1993)によると独立意識²⁷⁾が高いこと、加藤(2002)によると、育児をしている父親をもつ3歳児は情緒的、社会的発達が良い²⁸⁾、Ishii (1998)によると、父親とのかかわりが多い幼児は友達ネットワークが確立している²⁹⁾などのポジティブな影響が明らかにされている。

これらの研究は育児という経験が父親の発達にプラスを及ぼしたということを示した点で重要であるが、育児によって人は発達するという点を過度に強調すると「子どもを持つ」ことが唯一のライフスタイルとみなしてしまうことを指摘している³⁰⁾。

最後に母親の育児不安を和らげる父親の育児参加の効果をあげる。母親の育児不安や養育態度は子どもの社会性に影響を与えている。牧野（1982）によると、子育て中で感じられる負担感や疲労感の多い母親を持つ子どもは不安感が高く、わがまま傾向を示し、気分にもuraがあることが分かっている。³¹⁾ また、岩田（2000）は「子どもに対してイライラする」「子どもを大声で怒鳴る」「衝動的に手を挙げる」というリスクファクターは、とくに母親の「充実感欠如」と「育児不安」との関係が強いことを示した³²⁾。つまり、父親や周囲から子育ての援助を受けることができない専業主婦は、育児不安が虐待へとつながっていく可能性がある。牧野（1985）によると、「夫と一緒に子育てをしてくれている」と妻が感じている場合、母親の育児不安は低かった。父親の子育てに対する意識が母親の満足感に影響を与え、その満足感が母親の育児不安に影響を与えていることがわかった。従って父親が家事育児に積極的に参加することは、間接的に育児不安を和らげる効果があるといえる。³³⁾

3. 意識変容の学習に関する先行研究

意識変容の学習とは、批判的なふりかえりを通じ、ものの見方・感じ方・行為の仕方の

習慣的な枠組みである準拠枠を変えていくような学習を指す。³⁴⁾ メジローは、従来の成人教育研究ではこのような質的变化の側面が見落とされてきたとして、「変容」をキーワードに新たな成人学習理論の構築を進めてきた。彼の理論的主張は学習者の表明したニーズを固定的にとらえがちな自己決定学習モデルや行動主義的なプログラムデザイン、さらに、常葉（2004）によれば、成人教育が社会の改善ではなく現状の維持に加担する傾向に対して批判した。そして、当時の女性運動で行われていたコンシャスネス・レイジングや、フレイレ(Freire)の「意識化」の実践(1970, Freire)、認知を重視するタイプの心理療法(1963, Fingarette 1978, Gould) など、成人の認識の質的变化を目指す活動からも影響を受けながら、成人期の最も重要な学習は思考や行為の仕方を束縛している狭い解釈・認識の枠組み（意味パースペクティブ）を問い直していくことであるという独自の主張をしたと述べている。³⁵⁾

彼の主張した理論総体は、一般に「変容理論」と呼ばれ、1990年代に入ると、北米ではメジローの理論は「意識変容の学習の10年」と形容されるように、実践・研究の双方で広がりを見せた。例えば、変容的学習や批判的ふりかえりを促進する教育実践への関心が高まり、クラントン（Cranton）などのように、メジロー理論の実践への本格的な応用を目指すものも現れた。³⁶⁾

一方、理論研究の分野では、メジローの理論は肯定・否定を含めて様々な解釈を喚起し、活発な議論の対象となってきた。例えば、クラントン（1999）は、メジローの理論は十分なデータに基礎付けされたものではなく、経験的研究の成果を理論にフィードバックする作業が不足しているという指摘や意識変容の学習プロセスは研究成果が集められていないという批判もある。³⁷⁾ しかし、いずれにせよメジローの変容的学習の理論は、ノールズのアンドラゴジー論が支配的パラダイムであった当時の北米の成人教育において、風穴を開け、多様な議論の表出を促す牽引役となった。

日本におけるメジロー研究を見てみると、永井（1989）が解釈的パラダイムや解放への指向性に注目し、1980年代半ばから1990年代の半ばにかけて一連の研究を発表した。³⁸⁾ また、宮坂（1990）は、体制変革の前提としての人間の内面的変革を重視する立場からメジローの理論の意義を紹介している。³⁹⁾ 1990年代末にはクラントンによる実践者向けの著書が邦訳され、その中で変容的学習の概念が紹介されていることもあり、メジローの理論は日本の実践者・研究者の間にも広く知られ、言及・活用されるようになってきた。しかしながら、社会教育実践者がメジローの理論を活用し、プログラムデザインもしくは、評

価・検証した実践については国内では、吉岡(2006)⁴⁰⁾、(2009)⁴¹⁾や榊(2007a)⁴²⁾、(2007b)⁴³⁾の文献が近年、見られる程度で非常に少ない。

4. 理論枠組みを用いたプログラムデザインおよび評価の必要性

社会教育の分野において、実践したプログラムの効果を検証する研究は十分におこなわれていない。堀(2003)によると、これまでの研究は生涯学習の認知度、学習要求などを定量的に明らかにしてきた。しかし学習活動が内面的変化や発達に向かうものである以上、定量的な調査から学習をめぐる問題を論じるのには限界があるとしている。⁴⁴⁾ また、宮坂(1990)は1990年代の前半に、意識変革に関する研究はまさに緒についたばかりで、幼弱な段階にあること、実証的研究が難しく、アクションリサーチの有効性が明らかであるが、当時の諸条件の基では、そこまで進んでいないことを述べている。⁴⁵⁾ つまり、社会教育の分野で10年過ぎても、意識変容の学習の実証研究がいかに進んでいないのかを物語っている。近年になって、ようやく上記の意識変容の実証研究が散見されるようになったが、意識変容の学習の理論を用いてプログラムデザインし、評価・検証まで行ったわが国の論文では筆者の知る限り存在しない。

さらに、実践者側の視点として、アカデミックな研究の成果を利用してプログラムデザインをしようにも、現場で利用しやすいコンパクトにまとめられた成果はほとんど見当たらない。⁴⁶⁾ たとえば、介護予防教育の分野では、東京都老人総合研究所で考案された「地域型認知症予防プログラム実践ガイド」⁴⁷⁾がある。これは1冊の書籍に、①認知症の概要、②認知症予防の根拠、③認知症予防の対象とアプローチ方法、④地域型認知症予防プログラムとは、⑤プログラムの進め方、⑥プログラムの立ち上げから自主化までのプロセス、⑦効果測定(CD-Rで結果数値を入力すると効果測定結果が分かるもの)が介護予防のエビデンスに基づいて分かりやすい内容でまとめられている。このような書籍を用いて、共通の認識で事業展開をすれば、社会教育実践者間で事業効果の比較が容易にできる。さらに、社会教育行政の場合、人事異動サイクルは3～4年と短いスパンである。その場合の新任者による運営でも、一定レベルの講座運営のノウハウを引き継ぐことが可能になる。この実践ガイドのように、はじめて講座運営の経験をする場合でも、一定レベルの講座が開催でき、評価まで行えるようなパッケージ化された参考書が必要であり、今後その方向性を考慮した取り組みが必要だと感じている。

Ⅲ方法と対象

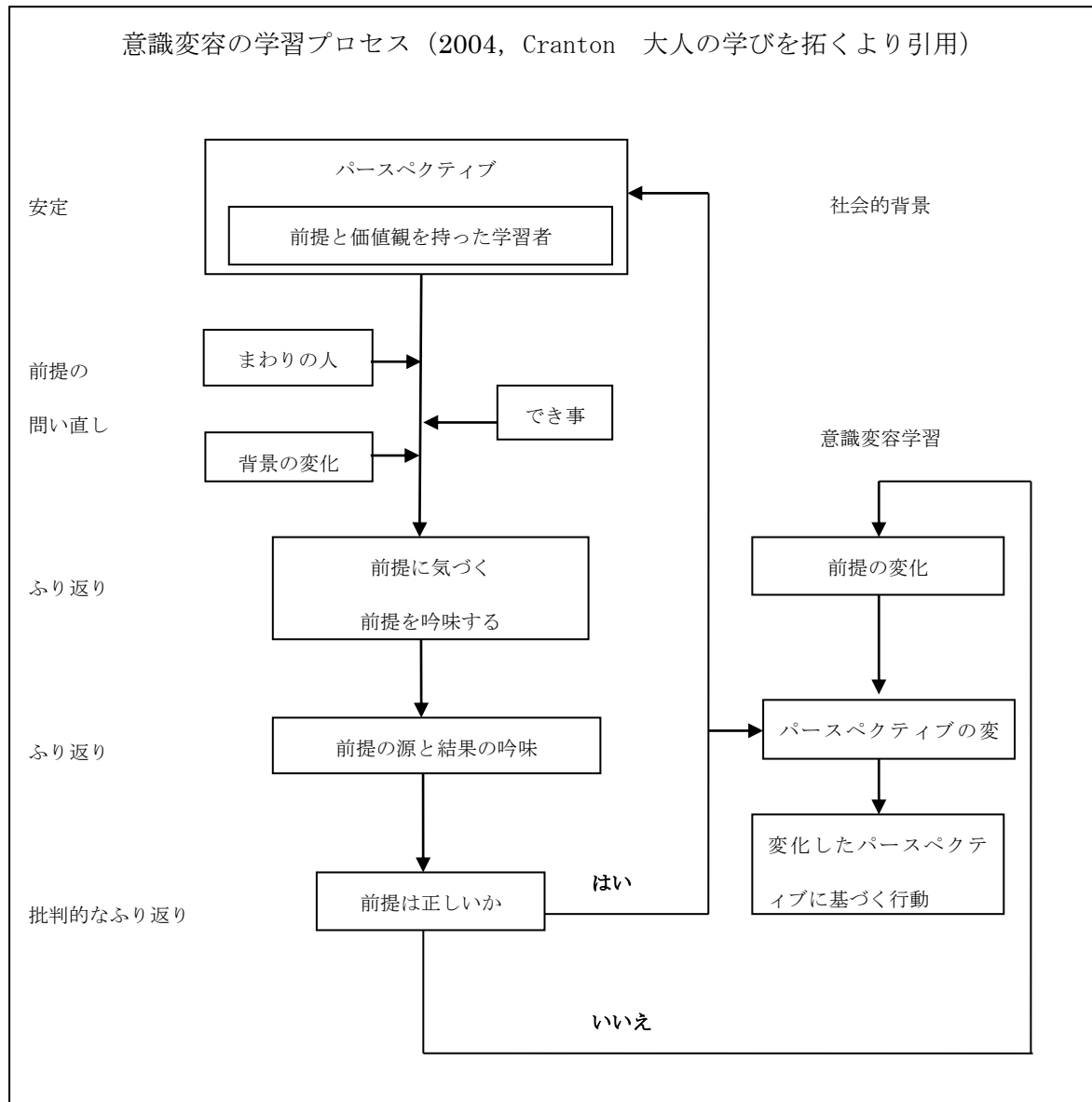
1. 調査概要

本研究では、父子を対象とした宿泊キャンプを2回実施する。そのサイクルは、①プログラムデザイン→②1回目キャンプ実施→③データ収集→④初回結果考察→⑤プログラム再デザイン・修正→⑥2回目キャンプ実施→⑦データ収集→⑧最終結果考察のサイクルで行う。データ分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用し、参加者の意識・行動変容のプロセスを明らかにし、社会教育現場で利用可能な理論構築を目的とする。その上で、プログラムの影響を受け変化が大きかったプロセスに着目し、「父親の子育て参加意識変容に効果的な学習プログラム」を考察するものである。

2. プログラムデザインの理論的枠組み

1) 理論的枠組み

プログラム構成については、メジローの意識変容の学習の理論を用いた。この学習は、自己を批判的にふり返ろうとするプロセスであり、私たちの世界観の基礎をなす前提や価値観（意味パースペクティブ）を問い直すプロセスである。価値観は必ずしも変えられるわけではないが、検討はされる。つまり、これまで意識されていなかった自己の前提としての価値観を明らかにし、そのうえでその価値観を受け入れて正当化するか、あるいは変更するか、否定したりすると定義している。⁴⁸⁾ この理論の基盤にあるのは、人間は自分が現実に対して与える意味に基づいて行動しており、個人の側にある心理的枠組みによって解釈・意味生成のプロセスが組織化されるという考え方である。これは社会学におけるシンボリック相互作用論や現象学的社会学、あるいは心理学や心理療法分野における構成主義等の前提と共通している。⁴⁹⁾



このプロセスが本研究のキャンプで起こりうる場面として、以下のような事例が考えられる。例えば、『子どもをたしなめる他の父子の姿をみて、「いままではきつく叱りすぎていたかもしれない。」と気づきが生まれる。他人に迷惑をかけないように、無意識のうちに厳しく接してしまっている意味パースペクティブを改めて認識し、その是非を検討している学習場面』である。

このように学習効果を高めるには様々な見方・考え方を知ったり、ある事柄が本当に妥当であるかどうか確かめるには、他者とのやり取りや知識・経験の共有が不可欠である。また、この学習は、生き方の変化のように明確に現れる場合のほかに、既存の行為パター

ンを再肯定することもある。「変容」の本質的な意味は、行為の内容ではなく、行為がどのような意味や解釈に基づいて決定されているか、またその意味や解釈がどのように生成されたかという部分である。

つまり、意識変容の学習とは、「過去に無批判的に学習してしまった狭い枠組みから抜け出し、自己の幅広い選択肢・可能性に気づき、他者との相互作用を通じて、思慮深く選択決定できるようになる」というプロセスの変化を指すのである。

2) 具体的なプログラムデザイン

本プログラムは、1泊2日の父子を対象としたキャンプにて実施した。参加者の募集は、A町のB幼稚園を通じて行った。B幼稚園には募集チラシの配布、参加申込書の回収に協力をいただいた。参加の条件は父親と子どもが参加することである。また、父親が参加した場合、母親も参加することも可能とした。

また、幼稚園児を持つ父親を調査対象としたのは、小学生の子どもを持つ父親と比べ、夫婦間の役割分担がまだ固定化していない時期と考え、意識変容や行動変容が起こる可能性が高いと考えたためである。また、乳児は野外活動のため安全の確保、体調の管理が難しく、さらに父親が子どもの世話にかかりきりになり、父親同士の交流が促進されない可能性があるため対象とはしなかった。

実際のプログラムでは「批判的なふり返し」が起こるには、入江（2006）によると、参加者同士の会話、もしくはスタッフとの会話、さらに他の親子の関わる様子を見ることで促される⁵⁰⁾と述べており、「批判的なふり返し」が出来るだけ多くの場面で起こるようにプログラムをデザインした。

3) 第1回目プログラムおよび第2回目プログラム内容および改善点について

第1回目のキャンプ（2009年5月9～10日）と第2回目のキャンプ（2009年9月5～6日）プログラムは表1、表2（p18～20）のとおりである。場所はいずれも埼玉県立名栗げんきプラザで行った。この施設を選んだ理由は、参加者が車で1時間30分程度で行くことができ、近隣にカヌーができるダム湖や川遊びに適した河川が近接しているためである。

第1回目キャンププログラムの構成は父親同士が密に交流し、会話を交わし合うこと、および他の父子の様子を見ることが、自己の意味パースペクティブをふりかえることになり、意識変容の学習に不可欠な要素と考えた。しかし、筆者がパイロットスタディとして

参加したキャンプにおいて男性同士が会話を交わし、人間関係が出来ていくまでには、女性に比べ、相当時間がかかった経験がある。そこで、男性同士ということで急激に親しくなるのは難しいと考え、徐々に交流が深まるようにプログラムをデザインした。

具体的には、1日目の午前中のカヌーは親子で行動しリラックスしたムードを作るように配慮した。その後の昼食では、お互いの家族で会話ができるよう小さめのブルーシートを用意した。午後のカヌーでは子どもとスタッフで同船し、父親は木陰で休憩を兼ねて会話ができるよう時間に余裕を持たせた。夜の懇談会は話しやすい雰囲気づくりのために適量のアルコールを用意するとともに、懇親会の会話に集中できるようスタッフが子どもを預かるようにした。2日目は家庭で再現できるような活動として、朝の親子散歩とラジオ体操を行った。昼食の野外調理では、家族間の交流をさらに進めるために、複数の家族が交流しながらピザを作ることができるように班分けをした。

このキャンプの結果、および事後インタビュー調査から、以下の表のとおり3点が改善点としてあげられた。その点をふまえ、2回目のプログラムを修正したところ、下記ののような効果が確認された。

＜第1回目キャンプの課題と2回目キャンプでの改善点および成果＞

課題①：第1回目キャンプ	父親の自発的な交流は、活動にゆとりをもたせ話す時間を作ることで、予想以上に進まなかった。
第2回目キャンプでの改善点	会話を持たざるを得ない内容のプログラムとして組み込んだ。具体的には、父親同士で話し合い、自由に調理内容をきめる野外調理とした。また、他の親子の関わりを見ることができるようテーブルの配置、活動範囲の制限物といった物理的な環境にも配慮した。
第2回目キャンプでの成果	父親同士の会話が生まれるとともに、あわせて他の親子の様子を見ることがでの気づきを促すことができた。また、副次的効果として父親が他の家の子どもの面倒を見る効果も現れた。

課題②：第1回目キャンプ	懇親会で父親の立場を否定するような資料の提示をしたり、母親が近くにいたことや、母親グループと意見交換をしたことにより、会話が全く進まなかった。（父親が参加した場合、母親も参加できるという条件で募集したので夫婦で参加した家族が1組あった。）
第2回目キャンプでの改善点	母親は懇親会では同室としない、父親と母親の意見交換をしないこととした。また、資料の提示はせずに話し合いが活発になるまでは筆者が話を進行し、他の父親の子育て内容を知ることができるようにした。
第2回目キャンプでの成果	バンガローに父親だけで入り、安心して話し合える環境で懇親会を行った。活発な議論は無かったが、本音で淡々と語る姿がみられた。自己の子育て実践の紹介も行われ、気づきを促すことができた。

課題③：第1回目キャンプ	家庭で再現ができるように、誰でも経験がある散歩とラジオ体操を起床後に行った。しかし、新鮮味にかけると、参加者にとっては印象的ではなかったようで意識・行動変容にはつながらなかった。
第2回目キャンプでの改善点	親子で体験でき、楽しく、さらに家庭でも再現できるような親子体操に内容を改善した。
第2回目キャンプでの成果	親子で身体を接触させながら、笑いが絶えない親子体操を行うことができた。帰宅後、インタビューできた父親全員が、家庭で親子体操を再び行っていた。

（課題①）父親の交流は予想以上に進まなかった。1日目の午後に父親だけで木陰で休憩を1時間ほどしていたが、ほとんど会話は生まれなかった。また、父親から食事中や活動時に積極的に他の父親に声をかける様子も見られなかった。2日目のピザ作りで同じ班の父親同士で少しずつ会話が増えていった。そのため、父親同士の活発な交流が生まれるように、父親同士が会話をしなければ活動が成立しないようなプログラムを作成していく必要があると考えられた。

この点をふまえて2回目キャンプでは、2日目の活動で父親同士が話し合って、自由に調理内容をきめる野外調理を行い、会話を持たざるを得ない内容のプログラムを行なった。あわせて、この野外調理では、子どもが魚をさばく、野菜の皮をむくなど難易度が高い内容を設定し、父親が子どもの面倒を見なくてはならない内容とした。さらに、調理をする

スペースを一定の範囲内に指定した。それにより、同じ班の父親がどのように子どもと関わるか、同じ班の中でお互いの様子が見られるようにした。

このような改善の結果、野外調理前にはほとんど会話がなかった父親同士が会話を交わすようになった。また、父親が他の家の子どもの面倒をみることがあったので、他の家の子どもと父親が交流できたという効果があった。

（課題②）懇親会では、日本の父親は海外と比較して、子どもと関わる時間が短いという調査結果を最初に提示して、会話が活発になるように試みた。しかし、子育てをしない父親の立場を否定するような雰囲気になってしまったのか、会話が全く進まなかった。さらに、女性班と途中で話し合った内容を交換して、さらに議論を深めようとしたが、妻が参加している参加者には相当な抵抗感があったことが、事後インタビューで確認できた。また、同席したスタッフには会話を恣意的に方向づけないために、発言しないように指示していたが、逆にその態度が原因で会話が進まなかった。この懇親会では、途中でスタッフ兼参加者である父親が自己開示を行い、それがきっかけになり会話が活発になった。以上の点から、会話の進め方や話し合いの場の環境的な配慮も必要であると考えられた。

この点をふまえて2回目キャンプの懇親会では、お互いの子育てに対する具体的な話や考えを引き出せるように、また、父親の立場を否定するような投げかけはしないように、筆者が質問をしながら進行するように変更した。具体的には、母親が参加した場合は同室とせず、父親だけでバンガローに入り懇親会を行うようにした。また、資料の提示はせずに最初は筆者が話を進行し、話が活発になってきたら、徐々に関わりを少なくし、父親同士の子育ての意見交換が活発にできるようにした。

このような改善の結果、活発な議論は無かったが、自己の子育て観や上手くいっている具体的な子育て方法を淡々と語る姿が見られた。事後インタビュー調査でも懇親会に対する否定的な発言は無く、むしろ気付きや発見があったと語られていた。

（課題③）親子での早朝の散歩と体操については、家庭で再現ができるよう、誰でも経験があり、いつでもできるような散歩とラジオ体操を行った。しかし、誰でも知っているということがで、逆に印象的ではなかったようで、変容にはつながらなかった。2回目のキャンプでは、親子で一緒に体験でき、楽しく、さらに家庭でも再現できるような内容に変更する必要があると考えられた。

この点をふまえて2回目キャンプでは親子で触れ合いながら、楽しくできるような親子体操に内容を改善することとした。

このような改善の結果、親子で体を接触させながら、笑顔が絶えない様子で体操を行うことができた。1回目キャンプのラジオ体操の後の疲れが抜けきれないけだるい雰囲気とはだいぶ印象が違っていた。早朝の親子体操は体を活動できる状態に近づけていく効果もあったように感じた。また、帰宅後に事後インタビュー調査ができた父子全員が家庭でも親子体操を再び行っており、効果が確認できた。

スプリングキャンプ「親子でもりもり漕ごう！はじめてのカヌー体験」（5/9・10）」進行表

ねらい	1. 「親子でのんびり自然のなかであそぼう！」：親子と一緒にカヌーや野外調理をしながら自然の中で遊ぶ。 2. 「子育てについて話そう！」：普段の子育が楽しくなる方法を懇親会で情報交換する。
約束	①お話をよく聞く、②お友達や自然と仲良くする、③自分のことは自分でする
スタッフ	全体進行（以降Dと表記）：1名（筆者）／プログラム責任者（PD）：2名／マネージャー責任者（MD）：1名／マネージャー（M）：6名／班リーダー（R）2名（PDが兼務）／サブリーダー（S）4名※2班編成
参加者	7名（父：3名 母：1名 子ども3名） ※スタッフ家族およびスタッフの子ども9名（父：2名 母：2名 子ども：5名）も一緒に活動（筆者除く）

5月9日（土）

時間	内容	場所	担当	ねらい	備考
9:50	名栗湖受付	名栗湖	S R		
10:00	はじめの集い	名栗湖	PD		調査の承諾・あいさつ（D）・スタッフ紹介
10:05	アイスブレイク	名栗湖	R		自己紹介・約束の説明・ゲーム
10:30	カヌー体験	名栗湖	R	親子で体験	
12:00	お弁当	名栗湖	M	狭いブルーシートで可能ならば円座で食べ、家族同士の交流をはかる	手洗い/うがい
13:00	カヌー体験	名栗湖	R	スタッフが子どもと可能ならば乗り、親と子どもの競争。親同士の交流。	風が強まり競争は中止
15:15	名栗湖発	名栗湖	全員		
16:00	名栗げんきプラザ着	宿泊室	PD		部屋表示、シーツ受領
16:45	夕食準備 ・手洗い/うがい ・テーブル拭き	食堂	M	親子・リーダーと一緒に班ごとに食事。リーダーが子どもの面倒を不自然にならない範囲でみる。親同士の話す時間を作る。	以降の食事時は、お茶はやけどの危険があるため、グループリーダーが準備。
17:00	夕食	食堂	全員		
18:00	入浴	浴室	全員	リーダーが子どもの面倒を不自然にならない範囲で一緒に風呂に入る。親同士の話す時間を作る。	浴室にタオルを持って入り、体を拭いて出るよう指導/支援する
19:30	明日の諸連絡	食堂	PD/M	諸連絡後子どもは別室にてお楽しみゲーム大会	子ども就寝20:30。寝付けられない子どもは親が帰ってくるまでフォロー
20:00	懇談会	食堂・寝室	PD	父親の子育てについて話し合う。資料を提示し、父親の子育てに参加できない（しない）理由とその対処策を話し合う。それを、簡単にまとめ父母で交換し、さらに話し合う。	懇親会：進行/ PD、記録/M
22:00	懇談会終了	食堂			
22:30	就寝	宿泊室	R	女の子+女スタッフ/男の子+男スタッフ/母/父以上4部屋確保。父親同士の交流を図る。	子どもだけで寝れないときは保護者の部屋に誘導する
23:00	スタッフミーティング	宿泊室	D/PD/R		
23:30	就寝	宿泊室	全員	寝不足厳禁！	

5月10日(日)

時間	内容	場所	担当	ねらい	備考
6:00	起床		R		6:45までに玄関前集合。着替え・寝具片付け
6:45	朝のつどい	屋上	R	自宅でも簡単にできる早朝の散歩を体験	散歩→施設屋上にてラジオ体操
7:20	朝食準備 ・手洗い/うがい	食堂	R	お腹を空かせて食べる朝食のおいしさを体験する。	班ごとに食事。親子で食べる。
7:30	朝食	食堂	全員		食後に以降の活動アナウンス
9:00	チェックアウト	宿泊室	R		・荷物整理、寝具整頓、忘れ物確認
9:10	自由時間	施設周辺	R/M	家族もしくはリーダーとのんびり過ごす。子どもは絶対に1人で行動させない。	10:00にプレイホール再集合し、野外調理場へ移動する。それまでは家族ごとの自由時間。
10:15	ドラム缶ピザづくり	野外炊事場	R/M	できれば、父親が自分の子ども以外の子の面倒を見れると良い。他の子どもの様子から自分の子どもの新たな一面の再発見を促す。	
11:45	昼食準備	野外炊事場	M		
12:00	昼食	野外炊事場	全員	楽しい音楽を流す。班ごとに食事。親子・リーダー一緒に。リーダーが子どもの面倒を不自然にならない範囲でみる。親同士の話す時間を作る。	食後に以降の活動アナウンス。手洗い/うがい
13:15	おわりのつどい ・グループふりかえり	プレイホール	PD		集いが始める前まで音楽を流す。
14:00	解散	プレイホール		スタッフ全員で見送り	
14:30	ふりかえりミーティング	食堂	D		
15:00	スタッフ解散				

サマーキャンプ「おさかな気分で川遊びと魚釣り」(9/5・6) 進行表

ねらい	1. 他の親子の関わりを見ることで自身の子育て観のふりかえりを促す。 2. 父親が子どもと二人だけの母親がいない環境で関わることで自身の子育て観をふり返りを促す。 3. 家庭で再現できる遊びを提供することで、キャンプ後の行動変容を促す
約束	①お話をよく聞く、②お友達や自然と仲良くする、③自分のことは自分でする
スタッフ	全体進行(以降Dと表記): 1名/プログラム責任者(PD): 2名/マネージャー責任者(MD): 1名/マネージャー(M): 6名/班リーダー(R) 2名(PDが兼務)/サブリーダー(S) 2名※2班編成
参加者	8名(父: 4 母: 0 子ども4名)※スタッフ家族およびスタッフの子ども3名も一緒に活動

9月5日(土)

時間	内容	場所	担当	ねらい	備考
9:50	受付	駐車場	S R		スタッフは川で受け入れ態勢準備
10:15	はじめの集い ・あいさつ(D)・スタッフ紹介	名栗川	P D		調査の承諾
10:25	アイスブレイク ・自己紹介・約束の説明・ゲーム	名栗川	R	準備体操を兼ねるアイスブレイク	
10:40	川遊び 箱メガネ	名栗川	P D	アイスブレイクを兼ねて親子で遊ぶ。慣れてきたところを見計らって、箱メガネは1班1個として、ここからグループ行動を30分くらいお昼まで行う。(グループはバラけても仕方ない)	「最大の狙いは父親同士の交流および他の親子の関わりを見ること」最初は親子で自由時間 11:20から箱メガネ説明(15分間)その後は自由行動
12:00	お弁当 ・手洗い/うがい	名栗川	M	狭いブルーシートで可能ならば円座になって食べることで、家族同士の交流をはかる	
13:00	釣り体験(名栗フィッシングバトル2009)	名栗川	P D	午後は最初から釣り体験。竿は家族で1本。	13:00から釣り説明(15分)、実演(15分) 14:15から班対抗釣り合戦。作戦を立てて開催。(家族観交流)表彰あり。
14:45	終了	名栗川	P D	撤収開始	15:00には必ず出発 場合によっては片付け班が残り片付け
15:00	名栗川	名栗川	全員		安全運転
15:30	名栗げんきプラザ着	バンガロー	P D		部屋表示、シート受領、以降自由時間
16:30	入浴	本館浴室	R/M	リーダーが子どもの面倒を不自然にならない範囲で一緒に風呂に入る。親同士の話す時間を作る。	浴室にタオルを持って入り、体を拭いて出るよう指導/支援する
17:20	夕食準備 ・手洗い/うがい・テーブル拭き・湯のみ・箸	食堂	M	全員でまとまって食事。親子・リーダー一緒に。リーダーが子どもの面倒を不自然にならない範囲でみる。親同士の話す時間を作る(懇親会に向けて打ち解けた雰囲気を作る)。	お茶はやけどの危険があるため、グループリーダーが準備
17:30	夕食	食堂	全員		帰宅の挨拶も
19:00	お楽しみ&花火	避難小屋前	全員		

20:00	懇談会（大人）	バンガロー	懇親会：PD準備：	父親の子育てについて話し合う。今日の川遊びを話の最初に伺い、会話のきっかけとする。※内容はインタビューガイド参照。	懇親会：進行、筆者。お茶等準備、父親と子どもは分かれて活動。
21:30	懇談会終了	バンガロー			21:45には親が子どものもとに戻れるように配慮。また、子どもが寝ていれば懇親会を続行。（スタッフ部屋にて）
22:00	就寝	バンガロー	全員		親子で一緒に寝る。
23:00	スタッフミーティング	バンガロー	D/PD/R		
23:30	就寝	バンガロー	全員	寝不足厳禁！	

9月6日（日）

時間	内容	場所	担当	ねらい	備考
6:00	起床 ・着替え ・寝具片付	食事広場	全員		6:45までに食事広場集合
6:45	朝のつどい	避難所前	R	自宅でも簡単にできる早朝の散歩と親子ストレッチを体験。事後インタビューで家でストレッチをやってみたか聞く。	親子ストレッチ後に散歩を兼ねて本館食堂まで移動。
7:20	朝食準備	食堂	M	お腹を空かせて食べる朝食のおいしさを体験する。班ごとに食事。親子で食べる。	お茶はやけどの危険があるため、グループリーダーが準備
7:30	朝食	食堂	全員		食後に以降の活動アナウンス
9:00	チェックアウト ・荷物整理 ・寝具整頓 ・忘れ物確認	バンガロー	全員		
9:10	サバイバルクッキング開始 作戦会議→調理→披露	食事広場	R	2グループに分けて他家族の子どものかかわりを見ることで気づきを促す。タイプの違うと思われる家族を組み合わせる。普段料理をしない人は母親の気持ちが分かるかも？	包丁で魚と野菜をさばく。子どもと父1匹、人参、たまねぎ、じゃがいもを1個ずつ。親と子どもの対処を見える範囲で行うこと。
12:00	昼食 ・手洗い/うがい	野外炊事場	全員	子どもが遊びだしたら、スタッフがフォローする。	食後に以降の活動アナウンス
13:00	ふりかえりの会 ・グループふりかえり（半構成的なフォーカスグループインタビュー） ・本部スタッフあいさつ（MD→PD→D） ・記念撮影	食事広場	PD	親子分離。子どもは自由時間。「お父さん同士話し合いをするのでみんなで遊ぼう」と子どもを連れていく。（絶対に単独行動させない）。	参加者の疲れがピークだったためインタビューは中止した
13:20	終わりのつどい	食事広場	PD		
13:30	解散	野外炊事場	全員	全員で見送り（避難所前にて）	
13:40	食器・飯ごう片付け	野外炊事場	全員		
14:30	スタッフ解散				

3. データ収集

1) インタビュー方法

調査対象者は、キャンプ参加者で承諾を得ることができた父親に対して行った。調査はキャンプの4～5週間後に筆者が実施した。第1回目キャンプ後には3名に実施した。また、第2回目キャンプ後には3名に対して実施した。2回目の調査対象者のうち、1名は第1回目のキャンプにも参加している。

面接の様子は IC レコーダーとテープレコーダーで録音し、そのデータは逐語化した。また、面接開始前に参加者の基本属性を調べるために質問紙調査を行った。その内容は名前・年齢・子どもの年齢・性別・勤務時間・両親との同居の状況・友人による子育てサポートの状況・キャンプ参加の動機である。

1回の面接は1時間から1時間30分で行った。質問項目は【現在の日常（生活）状況について】、【参加前の気持ち】、【キャンプで受けた影響：全体的】、【キャンプで受けた影響：プログラム別（2回目キャンプインタビューで追加）】、【キャンプ後の変化】の5カテゴリーに分け、半構造的に質問を設定した。質問項目が次項の第2回目キャンプ後のインタビューガイドのとおり、23項目と多いのは、対象者が男性であり自発的な会話が得られない可能性を考慮したためである。また、基本的に対象者の自由な発言があった場合には、対象者のペースで話していただきもらい、質問予定の内容が漏れないように確認しながら、質問の順序にはこだわらないようにした。それは、質問の内容に対する直接の答えよりも、対象者自ら語った内容のほうが、本心に近い語りが得られると同時に、筆者の恣意性も軽減できると考えたためである。

1回目のインタビューの結果より、筆者の恣意性を軽減すること、より豊かな語りを引き出し理論飽和へ近づけるように、2回目のインタビューガイドを以下のとおり改善することとした。

まず、キャンプから1カ月前後経過し、当時の記憶が薄れてきているため、キャンプ中の出来事に対して感じたことや、気付いたことを引き出すための工夫が必要であると考えた。そこで、2日間プログラム内容を時系列に記入したプログラム表を渡して、よりキャンプ中の出来事を思い出せるように配慮した。さらに、【キャンプで受けた影響：プログラム別】をインタビューガイドに追加して、キャンプ中の経験を調査対象者に思い出してもらいながら、どのプログラムで、どのように気がついたかを引き出せるように工夫した。

次に1回目のインタビューでは、キャンプ後に変化があったかどうかを直接聞いていたが、調査対象者は自分自身のことだけに変化があったかどうか気付くことができず答えにくく、語りが得られなかった。そこで、何が変わったか直接聞くのではなく、「楽しかったこと、印象的だったこと」というようにキャンプでの経験を出来るだけ聞くようにし、話の流れの中で対象者が意識や行動の変化を自発的に発言できるよう配慮した。これらの改善点は豊富な語りを引き出す効果と同時に“答えさせた”という恣意性を軽減することにもつながると考えた。

さらに、マイナスイメージの経験のほうで学習をより促進されるのではないかと考え「辛かったことや嫌だったこと」を【キャンプで受けた影響：プログラム別】の質問時に聞くようにした。

第1回目キャンプ：インタビューガイド

【現在の日常状況について】

※質問前にアンケート用紙への記入を依頼する。

- ①子どもと接する時間について（平日と休日）
- ②子どもと接するとき（育てる上で）心がけていることについて
- ③子育ての夫婦間での役割分担について。
- ④子育てをサポートしてくれる親族や友人について。

【参加前の気持ち】

- ⑤キャンプに参加しようと思った動機はどのようなものですか？

【キャンプで受けた影響：全体的に】

- ⑥キャンプの中で楽しかったこと（印象に残っていること）、楽しくなかったことをあげてください。どのような理由で楽しかった（楽しくなかった）のですか？
- ⑦他の家族や子どものことで気づいた点や印象的だった点がありましたか？
- ⑧懇親会はいかがでしたか？なぜ、良かった（悪かった、つまらなかった、影響を受けなかった）のですか？

【キャンプ後の変化】

- ⑨キャンプ後、子どもに対する気持ちや関わりの変化はありましたか？変化があった（無かった）のはなぜですか？
- ⑩キャンプ後、配偶者に対する気持ちや関わりの変化はありましたか？変化があった（無かった）のはなぜですか？
- ⑪今後、こんな父親になりたい、子どもと関わりたい、母親と関わりたいというお気持ちはありますか？実現は可能ですか？実現が難しい要因は何ですか？どのようなサポートや環境の変化があれば実現できそうですか？

第2回目キャンプ：インタビューガイド

【現在の日常状況について】

※質問前にアンケート用紙への記入を依頼する。

- ①夫婦間での子育ての役割分担について。
- ②同じ年齢の子どもがいる父親の友達・知人がいるかについて。
- ③キャンプ後の休日はお子様とどのように過ごしているかについて。

【参加前の気持ち】

- ④キャンプに参加しようと思った動機はどのようなものですか？

【キャンプで受けた影響：全体的に】

- ⑤キャンプの中で楽しかったこと、印象に残っていることがありましたか？
- ⑥キャンプの中で嫌だったこと、楽しくなかったことがありましたか？
- ⑦あなたのお子様で印象的だったことや新たな気付きはありましたか？
- ⑧あなたのお子様で残念だったことや、やらないでほしかったはありましたか？
- ⑨他の家族や子どものことで気づいた点や印象的だった点はありましたか？

【キャンプで受けた影響：プログラム別】

- ⑩初日の午前中の川遊びで、楽しかったこと、印象に残っていることはありますか？
- ⑪初日の午前中の川遊びで、大変だったこと、嫌だったこと、困ったことはありますか？
- ⑫初日の午後の魚釣りで、楽しかったこと、印象に残っていることはありますか？
- ⑬初日の午後の魚釣りで、大変だったこと、嫌だったこと、困ったことはありますか？
- ⑭入浴と夕食でお気づきになられたことはありますか？
- ⑮懇親会の発言で印象的だったこと、影響を受けたこと、発見した点はありましたか？
- ⑯懇親会の発言で印象的だったこと、嫌だったこと、困ったことはありますか？
- ⑰2日目の朝の親子体操で、楽しかったこと、印象に残っていることはありますか？
- ⑱2日目の朝の親子体操で、嫌だったこと、困ったことは何かありますか？
- ⑲2日目の野外調理で、楽しかったこと、印象に残っていることは何かありますか？
- ⑳2日目の野外調理で、嫌だったこと、困ったことは何かありますか？

【キャンプ後の変化】

- ㉑キャンプ後にご自身のお子様に対する気持ちや関わりの変化はありましたか？
- ㉒キャンプ後の配偶者に対する気持ちや関わりの変化はありましたか？
- ㉓キャンプ後に子育てに関係する関心ごと変化はありましたか？

2) 倫理的配慮

面接調査時には、倫理的配慮として、以下のことについて承諾を得てから調査を開始した。その内容は、面接を録音すること、メモを取ること、個人を特定できるような情報の提示の仕方をしないこと、答えたくない質問があったら答えなくてよいこと、面接調査の途中で参加を辞退して構わないこと、録音されたデータと逐語録やメモなどは調査者以外に譲渡または貸与しないことである。

3) インタビュー対象者の属性

	Aさん	Bさん	Cさん	Dさん	Eさん
父親の年齢	30 歳代後半	30 歳代後半	40 歳代前半	30 歳代前半	30 歳代前半
子どもの性別・年齢	長女 6 歳 次女 5 歳 長男 3 歳	長男 6 歳	長男 4 歳	長男 5 歳 次男 1 歳	長女 5 歳 次女 0 歳
父の勤務／通勤時間	8 時間／ 15 分	10 時間／ 10 分	9 時間／ 1 時間	8 時間／ 15 分	10 時間／ 1 時間
母の勤務／通勤時間	2 時間／ 15 分	0 / 0	0 / 0	0 / 0	0 / 0
子どもと過ごす時間（平日／休日）	5 時間／ 12 時間	3 時間 30 分／ 15 時間	1 時間／ 10 時間	3 時間／ 12 時間	1 時間／ 10 時間
夫婦間での子育て 負担割合	夫：妻＝ 50：100	夫：妻＝ 90：100	夫：妻＝ 10：100	夫：妻＝ 100：100	夫：妻＝ 50：100
両親との同居・別居	同居	車で 15 分以内 の所に住んで いる	車で 60 分くら いの所に住ん でいる	同居	車で 15 分以内 の所に住んで いる
子育てで困ってい ること	①養育費②子 どもの遊び場 がない	①家が狭い② 子どもが安全 に遊べる場所 が無い	①子どもと接 する時間が短 い②子どもの 病気が心配③ 子どもの幼稚 園での生活	①子どもの幼 稚園での生活	無し
キャンプの参加動機	父親の意思で	子どもに頼ま れて／父親の 意思で	配偶者に進め られて	父親の意思で	子どもに頼ま れて
面接日	春 6 / 18 夏 10 / 17	春 6 / 20	春 6 / 14	夏 10 / 19	夏 10 / 25
参加キャンプ	春・夏	春・夏	春	夏	夏

4) データ分析の方法

本研究の分析方法として、実践的活用のための理論を生成することができる⁵¹⁾ 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTA）を以下の4つの視点を基に採用した。

第1の理由は、人と人の社会的相互作用にかかわる現象を明らかにすることができる特性がある。参加者同士の関わりや参加者とプログラムを介したスタッフとの相互作用により、意識変容の学習がどのようなプロセスを経て展開されているか時系列に沿って、明らかにしたいと考えたからである。

第2の理由は、M-GTAは理論生成への志向性を持っていることである。現在の社会教育実践において、成人教育でコンパクトな利用しやすい理論は筆者の知る限り存在しない。本研究において、その理論を提示することに意義があると考えたからである。

第3の理由は、M-GTAでは、分析結果の実践的活用を重視している。分析結果は子育てに関する学習以外にも、成人の男性を対象とする学習に応用可能なものである。今後、実践の場で筆者自身がこの結果の利用をしていきたいと考えたからである。

第4の理由は、M-GTAはオリジナル版との相違点として、データを切片化しないことがあげられる。1泊2日のプログラムでは、行動変容が明確に現れない可能性がある。意識・行動変容への小さなきっかけや変化の始まりをとらえるには、データを切片化せず、そのままの文脈を大切にしたいほうが、解釈が深まると考えたからである。

次にM-GTAのデータ分析手順について説明する。

まず、もっとも多様性がありそうな1人の逐語録から、分析テーマに関連する箇所に着目し、分析焦点者であるキャンプに参加した父親にとって意味するものは何かを解釈する。その部分を具体例とする概念を生成し、分析ワークシートに記入する。分析ワークシートとは、概念の名称、概念の定義、概念の具体例となるバリエーション、そして分析の際浮かんできたアイディア等を書きとめる理論的メモの4項目で構成される。また、概念とは分析の最小単位で、現象の多様性を一定程度説明できるもので、なおかつデータの着目部分からいえる範囲で解釈されたものである。

次に実際に生成した概念についてデータを基に説明する。まず、逐語録の中の分析テーマ「キャンプ参加者の時系列の気付き、意識・行動の変化プロセスを明らかにする」に関連する箇所『同じ怒るにしても、「なんか姉ちゃんはちょっと強く怒ってたかなあ」ぐらい。

（中略）ちょっと「俺もいかなかな」みたいな。』という部分に着目した。まず、この部分

についての意味を解釈し、それを適切に表現する言葉とは何かという順序で検討を行った。そして、検討を重ねた結果「父子で集団活動をすることで、他の親子の様子を見たり、他の父親の話を聞き、自分自身の子育てに対する考え方と比較することで、その考え方が変化し始めている状態。」という定義にし、最終的に「変化し始める子育て観」という概念を表3のように生成した。

表3 分析ワークシートの例

分析テーマ	キャンプ参加者の時系列の気付き、意識・行動の変化プロセスを明らかにする
概念6	子育て観が変化し始める
定義	父子で集団活動をすることで、他の親子の様子を見たり、他の父親の話を聞き、自分自身の子育てに対する考え方と比較することで、その考え方が変化し始めている状態。
バリエーション	<p>【A春】</p> <p>A 同じ怒るにしても、「なんか姉ちゃんはちょっと強く怒ってたかなあ」ぐらい。</p> <p>Q 他の参加者の人は割りと、そこら辺は「きつく怒ってないなあ」っていう風に思われて、そういうお考えに？</p> <p>A になったんでしょうかね。この、ゆとりのある接し方を見て。</p> <p>Q ゆとりのある。ゆとりですね。</p> <p>A ちょっと「俺もいかんかな」みたいな。⁽¹⁾</p>
理論的メモ	○【A春】①の下線部(1)「俺もいかんかな」と考え、自己の子育て観を否定するとともに変化し始めている判断。(11/21)

このように概念を生成しながら、さらに作った概念の有効性を確認する。概念の有効性の確認方法としては、まず作られた概念の類似例であるバリエーションを同一の人の他の箇所から、もしくは別の人の逐語録から見いだせるかどうかである。見いだせない場合は基本的にその概念は有効でないと判断する。しかしながら本研究においては、調査者数が多くなかったので特別な理由がある場合は、その内容を理論的メモに記入して採用している場合がある。これは例えば参加過程において父親が主体的に参加を希望する場合と、母

親が強い参加意向を示して母主導で参加にいたることが分析の結果分かったが、母主導で参加した人が1人しかいなく、当然その語りは1人からしか得られないような場合である。

また、解釈の恣意性を防ぐため、出来る限り筆者の解釈とは反対の例を逐語録の中から探しだした。このように、生成概念の有効性を見ながら、同時並行で概念間の相互関係を考え、複数の概念のまとまりであるカテゴリーを作る。そして最終的に概念とカテゴリーで明らかにしたい現象を説明する結果図とストーリーラインを作成する。次の図1はこの思考法を示したモデルである。

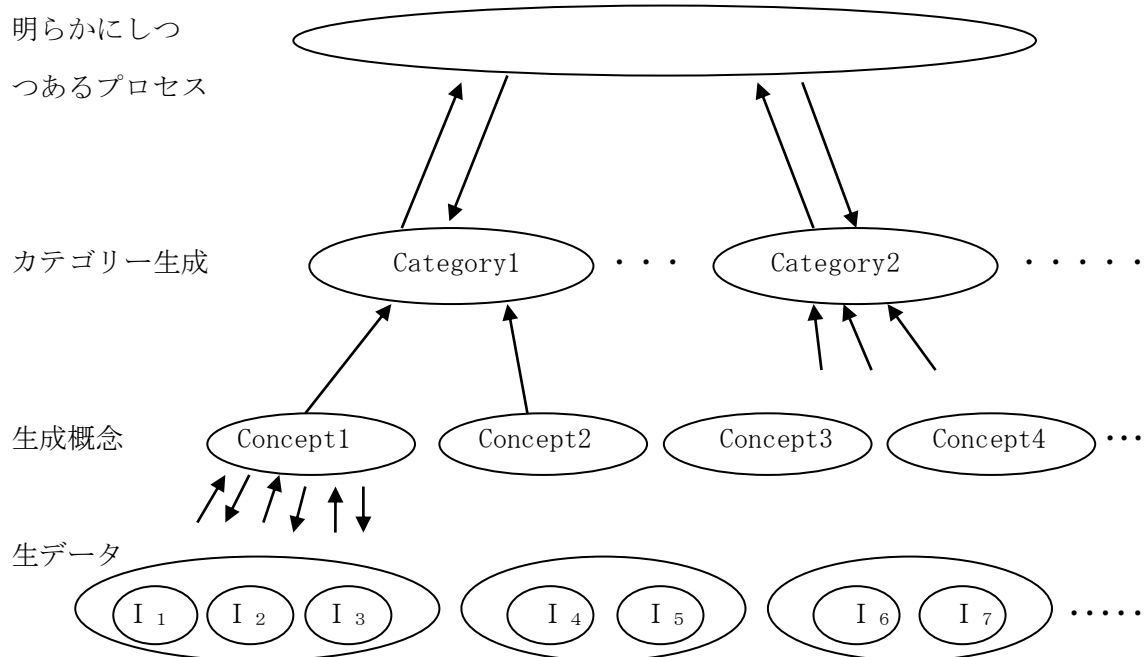


図1 概念生成モデル (木下, 2003)

IV. 結果と考察

1. 結果提示の説明

M-G T Aでは、結果が概念とカテゴリによって提示される。カテゴリには、中心となるコアカテゴリがある場合がある。本論ではカテゴリを< >で囲み、概念を下線で表している。コアカテゴリのみ< >に加え□で囲ってある。それぞれのカテゴリや概念には、それらを支持する生の語りが提示されている。発言者は例えば〔D夏〕ならば、Dさんのサマーキャンプ後のインタビューを意味する。今回、事後インタビュー調査を行った5人のうちAさんは、1回目のスプリングキャンプと2回目のサマーキャンプに参加し、インタビューを2回受けている。そのため、〔A春〕と〔A夏〕と表示している。

また、以下のストーリーラインは分析結果の全体像をコンパクトに示すものである。結果図については概念もしくはカテゴリの関係性を示した図である。

2. ストーリーライン

キャンプ参加のプロセスは<母主導参加決定過程>と<父主体参加決定過程>の2つがある。

<母主導参加決定過程>は幼稚園から配布された募集チラシを園とつなぐ母が父親に手渡すことから始まる。父親がキャンプに対して興味を持ち、父親の楽しみを感じても、参加には消極的である。この背景には父は仕事、母は子育てといった性別役割分業意識が影響している。しかし、それでも母親と一緒に参加を希望し、父親に強く参加を勧める場合は母主導で参加にいたることもある。

一方、<父主体参加決定過程>では、普段、仕事で子どもと関わる時間が少ない父親は、キャンプが子どもと接する良い機会であると感じ、埋め合わせ願望からの参加意向を強める。同時に子どもに対して参加意向を確認し、子どもが参加したいと思うことで、参加が決定する。この参加決定の背景には<善き父親願望>があり、子育てに前向きで、関心が高い父親像が関連している。社会教育の参加者は教育に関心を持ち、自ら進んで学習機会を求める積極的な人が多い⁵²⁾と報告されているとおり、この過程は特定の意識を持った父親の感覚であると考えられる。

キャンプに参加した父親の意識や行動が変化するプロセスは、<共感的関わり変容過程>と<内的思考変容過程>という2つのプロセスを経て変化している。

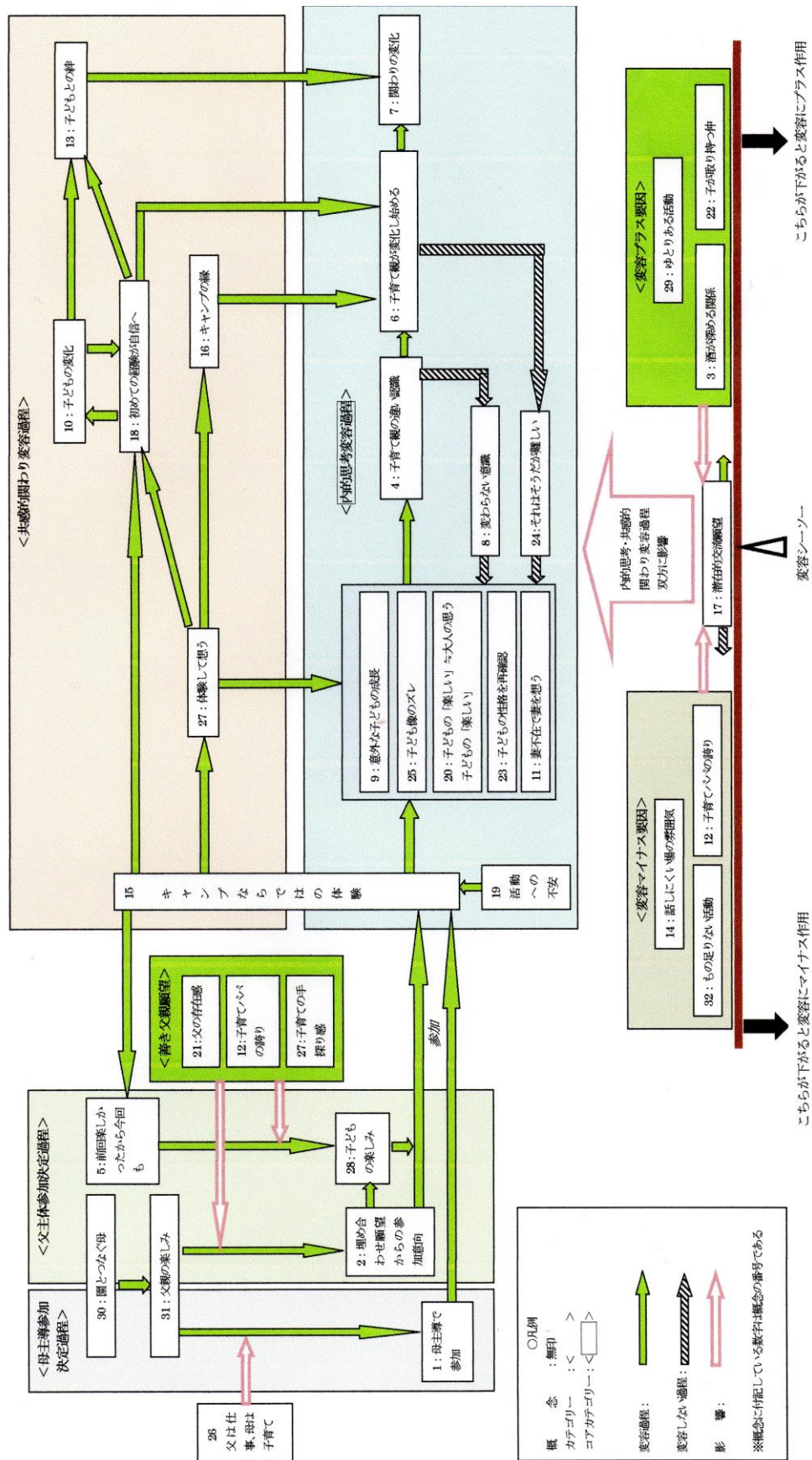
1つ目の＜共感的関わり変容過程＞は、プログラムを子どもや他の家族と一緒に経験・共有するキャンプならではの体験で深まるものである。父子での宿泊という初めての経験が自信へつながり、さらに、共有体験を経ることで子どもの変化をもたらす。それらの特別な体験を経験することで、子どもとの絆が深まるのである。

2つ目の＜内的思考変容過程＞は、他の父親の話した内容や他の父子が接している姿を見ることで、気づきや変容が起こる。この過程はキャンプならではの体験をすることで父親が意外な子どもの成長や、子どもの性格を再確認などする。そのことで、普段は意識していない父親自身の価値観や子どもの姿に改めて気づき、他の家族と自分の子育て観の違いを認識するようになる。このことにより、父親にとって有益な考え方や共感できる考え方を参考に子育て観が変化し始め、子どもとの関わりの変化にいたる。しかし、全ての場合において子育て観が変化するわけではなく、変わらない意識のままで、今までの自分自身の価値観を再肯定し、変化しない場合がある。たとえ、子育て観が変化し始める場合でも、自分自身の家庭環境と照らし合わせた場合、子どもとの接し方が変化しないこともある。例えば一人っ子の父親が接するような丁寧さを、3人子どもがいる父親が行うことは物理的にできないような場合である。

このように＜共感的関わり変容過程＞と＜内的思考変容過程＞は父親と子ども、もしくは父親同士の相互作用により関係が変化する。この過程には＜変容プラス要因＞である、ゆとりある活動、酒が深める関係、子を取り持つ仲が影響していた。また阻害する要因として＜変容マイナス要因＞である、子育てパパの誇り、話しにくい場の雰囲気、もの足りない活動が影響していた。そして、これらの要因は、この変容プロセスの中心的概念である潜在的交流願望に影響を与えながら、変容プロセスが変化していくのである。

これまで述べてきたように、父親の子育て参加意識を高めるには、父親特有の気持ちである潜在的交流願望を、実際の交流にシフトさせるような働きかけや学習環境を、＜変容プラス要因＞と＜変容マイナス要因＞を基に、プログラムデザインすることが重要なのである。

【結果図】 キャンププログラムにおける父親の参加と変容の構造



4. 結果の全体像について

キャンプへの参加決定については、＜父主体参加決定過程＞と＜母主導参加決定過程＞の2つのプロセスがあり、参加者の子育て観や日常の子育て環境に影響を受けながら参加にいたることが明らかになった。

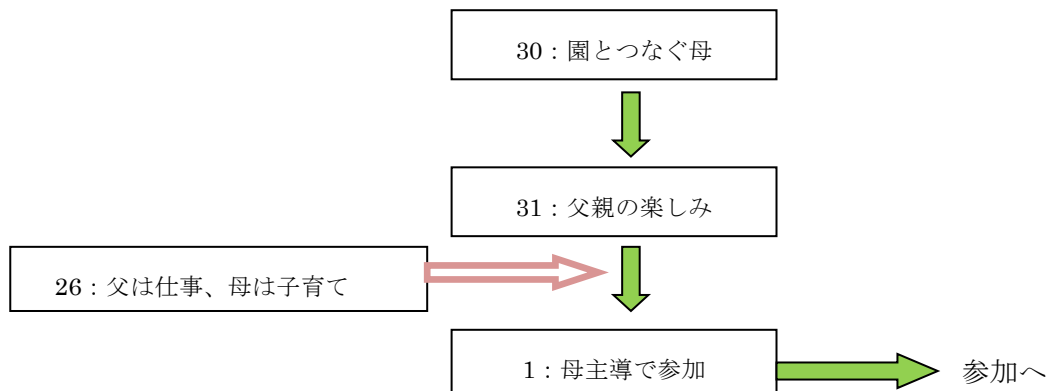
一方、キャンプに参加した父親たちの子育て参加意識に関する気づきから意識・行動変容までの相互作用プロセスは、プログラムおよびプログラム以外のキャンプならではの体験を通じて変容する。この変容のプロセスは2つある。

1つ目は、＜共感的関わり変容過程＞で普段とは違う環境において父子で、生活体験をすることで絆が深まるプロセスである。

2つ目は、＜内的思考変容過程＞で他の父親の発言、父子の関わる様子、自分の子どもとの関わりが気づきを促し、意識・行動変容にいたるプロセスである。

さらに、これら2つの過程を促進する＜変容プラス要因＞、もしくは阻害する＜変容マイナス要因＞があり、変容過程に影響を及ぼしていた。

1) ＜母主導参加決定過程＞について



＜母主導参加決定過程＞は幼稚園で配布された参加募集チラシを園とつなぐ母が父親に見せることから始まる。しかし、父親はキャンプの活動内容を見て興味を持ち父親の楽しみを感じるが、様々な事情により参加には消極的である。

C春：基本的にいびきが凄いので、極力参加したくない。会社のも参加しません。怪獣なんで。自分は寝ちゃえばいいんですけど、周りが。／

言葉通りに解釈すれば、「いびきをかくことで周りに迷惑をかける」から参加したくないと取れる。しかし、「(Cさんは子どもを) 大事にしているんだけど、なんか仕事での付き合いが楽しいみたいな感じでしたもんね、話を聞いていると。」〔B春〕の語りや、以下の〔C春〕の発言から子育てや家事に消極的な姿が浮かび上がってくる。

筆者：掃除とか洗濯とかはやられるほうですか？

C春：やらないです。できますけど・・・／

このように子育てに消極的で、父は仕事、母は子育てという性別役割分業意識を強く持つ父親の場合は、父子キャンプに参加する可能性は低いと考えられる。しかしながら、母親が参加に対して積極的であり、母親も一緒に参加する場合には、結果が異なってくる。

筆者：キャンプに参加しようと思った動機は？

C春：奥さんがね

筆者：行こうと？

C春：お父さんが行かないと参加できないから。／

このように母親のプログラム内容に対する考え方や期待感が、父親の参加に大きく影響を与える。そのため、母親と一緒に参加してみたいと思えるような内容、もしくは母親が子どもを参加させてみたいと思える内容を検討する必要がある。このことで、本来参加しないような父親でも参加する可能性がでてくると思われる。

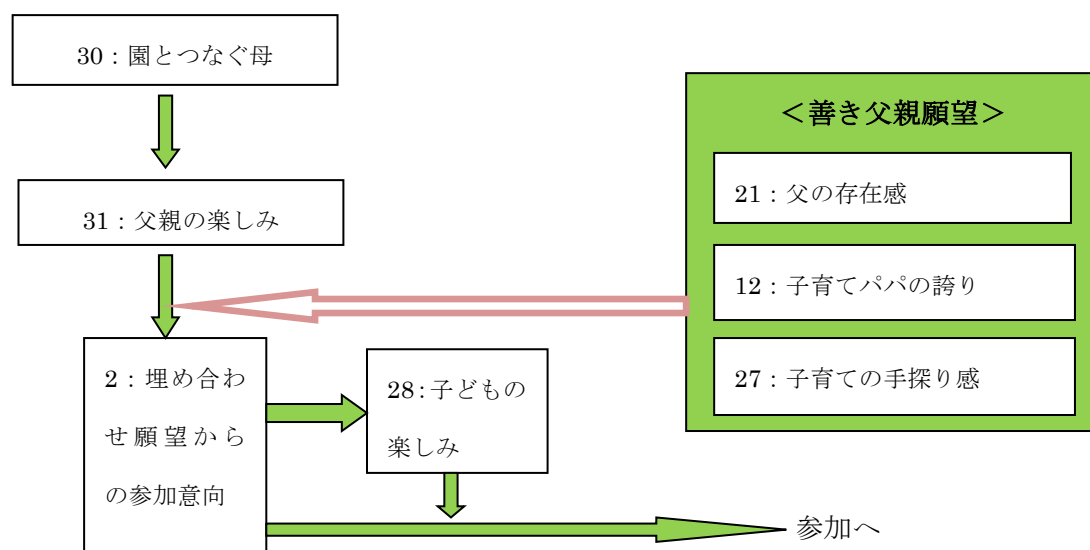
この父子キャンプの募集条件は、「父親が参加すれば、母親も参加はできる」というものだった。この条件を「父親だけでも、母親だけでも参加できる」としてしまうと母親が多く参加してしまう可能性がある。また、「父親しか参加できない」とするとCさんの場合は参加者に結びつかなかっただろう。このように参加率を高めるためには、「父親が参加すれば、母親も参加はできる」という条件が効果的であると考えられる。

また、母親が子どもを参加させてみたいと思わせるためには、プログラムが魅力的ということ以外に、ジェンダーの視点に配慮することも必要である。例えば、募集の際にキャンプということで、たくましさを前面に打ち出し過ぎると、「女の子なので大丈夫か？」

と母親は心配してしまうだろう。また、プログラムの名称にしても、「木の実を使ったアクセサリー作り」だと、男の子を参加させるにはためらいが生じるだろう。

このように母親と一緒に参加する場合はもちろん、参加しない場合も母親の影響力は大きいことに配慮して、参加者の募集方法を検討することが必要なのである。

2) <父主体参加決定過程>について



一方、<父主体参加決定過程>では、<母主導参加決定過程>と同様に幼稚園で配布された参加募集チラシを園とつなぐ母が父親に見せることから始まる。募集チラシを見た父親はキャンプの活動内容を見て内容に興味を持ち父親の楽しみをイメージすることで、参加してみたいと感じる。しかし、この気持ちが参加に直結するわけではない。それは以下の発言から読み取ることができる。

E 夏：あと、年長で幼稚園最後というので、年中だったら「う〜ん」どうしようかなで終わっちゃったかもしれません。／

このように興味はあり参加したいと思うが、なかなか踏み切れない場合、参加を左右する要因は2つ考えられる。

1つ目の要因として、子どもの楽しみな気持ちがある。しかし、子どもの楽しみにしていることは様々で「(カヌーを)『やりたい』って言ってましたね。」[A 春] のように活動

内容を楽しみにしている場合、「今回もこっちが誘ったからBくんくるよって言ったら、ウキウキだった。誰も居ないと乗らなかったかもしれないですけど。」〔D夏〕のように同じ幼稚園の子どもと一緒に参加することを楽しみにしている場合、『今回何やんの?』みたいな(間)は言っていましたけど、“何やりたい”はなかったですかねえ。〕〔A夏〕のように父親とキャンプに出かけること自体を楽しみにしている場合と一様ではなかった。

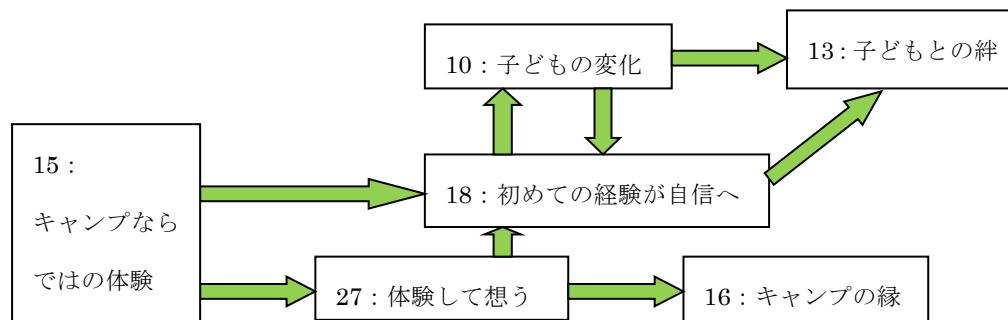
2つ目の要因として、埋め合わせ願望からの参加意向が大きく影響している。この願望は、父親が子育てに時間が取れないと悩み、後ろめたさを感じている気持ちである。

D夏：俺が子どもと一緒にできるのも、なかなかきっかけも無いので。まあ、きっかけが無いわけでも無いんですけど。他の子どもたちとか親同士もそうかな。／

国立女性教育会館の調査(2005)によると「子育て上の悩みや問題点」について、約4割の父親が「子どもと接する時間が短い」と回答し、父親の悩みの第2位であった。⁵³⁾

この過程で参加にいたる要因は、父親の参加したいという気持ち以外に園とつなぐ母の存在、子どもの楽しみといった子どものキャンプへの期待、埋め合わせ願望からの参加意向の要因が重なった時に初めて参加にいたると考えられる。このため、募集を行う際には、父親や子どもが参加してみたいと思わせるような内容だけでなく、父親の「埋め合わせをしなければならない」という気持ちを考慮した募集方法の検討も必要だろう。例えば、チラシに、「夏の休みの思い出作りに参加しませんか?」とか「子どもと一緒にの時間取れていないお父さんにオススメ企画!」のようにPRすることも参加率を高めるために効果的だと思われる。

3) <共感的関わり変容過程>について



<共感的関わり変容過程>はキャンプならではの体験という非日常的な環境で生活を共有することで、父と子どもとの絆を深めたり、キャンプの縁がきっかけで、地域での父親同士人間関係めばえていく過程である。さらに、<変容プラス要因>と<変容マイナス要因>の影響を受けながら関係性が変化する。

このプロセスでは父子が一緒にキャンプ生活をする中で、父親は様々のことを体験して思うようになる。

D夏：楽しいことは目白押しだったんですけど、なんか作ったりとか。楽しいことは山ほど。一緒に二人で朝早くから出掛けるところから、楽しみだったから。

その体験が「上手くいった」「こんなに楽しい」などの肯定的なものであると、初めての体験が自信へつながる。

D夏：まあ、二人でも全然出かけられるな。泊りでも、行けるなと思ったのと（間 12 秒）一番かな？どこでも行ける。何でもできると思った。

このように父親が子どもとの関わりに対して自信を高めることは、子育て行動を後押しする力となり、下記の〔D夏〕のように、子どもの変化に影響を与えたり、〔E夏〕のように、子どもとの絆を深める。

D夏：（親子体操は）まあ、たのしかったです。楽しんでやればね、子どもも楽しいから。多分、楽しませよっていう気持ちがあったから、あれなんですけど。面白くやろう

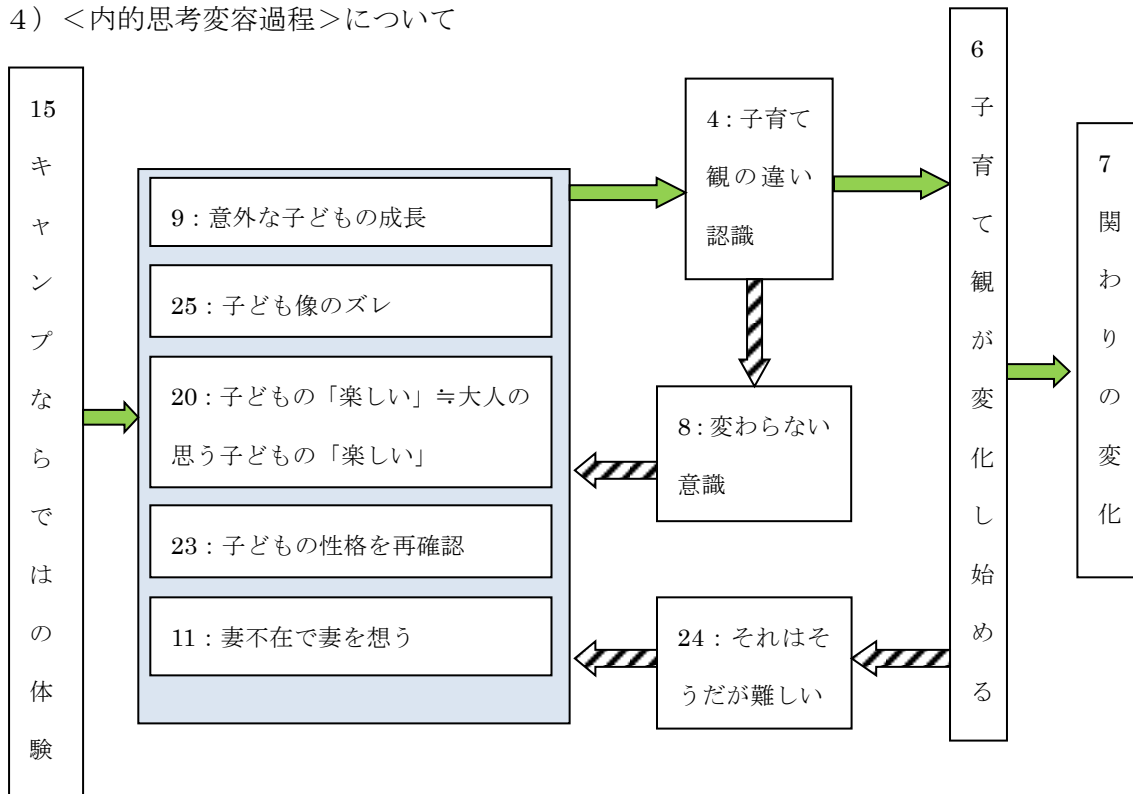
というか、面白くやるというのとあれですけど。帰ってからやってやってって。

E夏：普段接してないので、あれやったねとか、こうだったねと話しかけることは増えてま
したね。キャンプに参加することで。あの時はこんあふうだったよねとか、いうよ
うな、なんていうんですかね、えーと同じような場面があると、キャンプの時はこ
うやったよね、というのは言えるようになったんですかね。子どももそうだったね
って。

＜共感的関わり変容過程＞のプロセスは、本研究で十分に明らかにできたとは言い難い。
しかし、子どもとの関わりが増え、子どもとの絆を深める効果は明らかになった。このこ
とは、父親の子育て参加という「社会の要請」⁵⁴⁾にこたえうるプログラムであったと考察
できる。

また、キャンプの計画段階では、子育てに関する変容を促すために、カヌー、川遊び、
懇親会などの構成されたプログラムによって、父親の子育て参加意識を高めるように考え
ていた。当然、この構成されたプログラムの効果は確認できたが、このプログラム以外の
「父子で宿泊して、生活を共にすること」での意識、行動変容の効果も明らかになった。
このことは、子育てを促すという目的をもたないキャンプでも、子どもと父親と一緒に生
活することで、父親の子育て学習が自然に行われていることが証明されたといえるだろう。

4) <内的思考変容過程>について



<内的思考変容過程>は父親がキャンプならではの体験をする中で<変容のプラス要因>および<変容のマイナス要因>をそれぞれ受けながら、子どもや妻に対する気づきや発見がされている。

○意外な子どもの成長

A春：寝る時とかも「あのお姉さんたちと寝る」ってすぐ行っちゃいましたね。「ああ、そうなんだ」みたいな。「おお、1人で平気なの？」

○子ども像とのズレ

D夏：まあ、どんなことでもやらせたいと思うから、火あそびでもそうだけど。意外と火には興味が無かった。Bくんは火をじっと見ていたり、遊んだり。

○子どもの「楽しい」≒大人の思う子どもの「楽しい」

A春：自分ではそんなに楽しいと思わないのも、子どもが楽しいことがあるみたいで、ま

あ、ツボがどうかかという。

○子どもの性格を再発見

D夏：まあ、誰とでも仲良く、なれるんだなと、あと結構いろいろ他の子にちょっと言われると泣いたり、自分で何か失敗すると泣いちゃう。魚を落とすと泣いちゃう。気が弱いというか、そういうところを再確認っていうか、やっぱりなあ～って言う感じ。そういうところあるんだな～って。

○妻不在で妻を想う

B春：何か困ったことがあったんでしょうね。「お母さんが来ればな」ってポロって言っていました。

本研究のキャンプに参加した人は、事後インタビュー調査の結果、子どもと2人だけで宿泊した経験が無いことが確認できた。また、一般的に日常生活において父親が、他の家の子どもの様子を見たり、他の父親と子どもの関わり方を見る機会は非常に少ない。そのため、非日常的な生活環境で、父と子どもが濃密な関わりを持つ経験により、気づきや発見を促したものと考えられる。

さて、このような気づきや発見は単に気づきがあっただけのこともあれば、子育て観の違いを認識しながらに深まっていく場合もある。

E夏：いままで自分と他の家族を比較したことがあんまり無かったんですけども、良く考えてみると「子どものそばにいないくっちゃ」というのが強かったのですね。でも、参加してみると、（他の父子が）一定の距離をおいて（子どもを）見ていたんで、あーそういう感じでも良いのかっていうのはちょっと印象をうけましたね。

このように、他の父子の関わり方を実際に見ることで、自分の子育て観と比較している。さらに、この後、子育て観が変化しはじめる過程を経て、最終的に子どもとの関わりの変化いたる。

E 夏：(D さんが) 凄くきつめに (子どもを) 叱ってしまうので、怒りすぎかなって、話はしていたと思うんです。／

という D さんの発言を受けて以下のように E さん自身の考え方をふり返っている。

E 夏：自分は怒らなさすぎかな (笑)。／

その上で以下のように子育て観が変化し始める。

E 夏：いままで、変な話、理由を「何々だからダメでしょ。」感じで言おうと思っていたのです。「これ、これこうなっちゃうから、こういうことしちゃいけないのだよ」って。でも、やっぱりやっちゃうのですよ。で、まあ話 (D さんが子どもを強めに叱るという内容) を聞いて、強めに怒っているって。それで、ダメだということを強めに言っちゃおうと思った。」／

このように、子どもへの叱り方を修正し始めようとしているのが分かる。さらにその後の語りから子どもへの関わりの変化が読み取れる。

筆者：実際に怒ることはあったのですか？

E 夏：いま、何回かあります。自転車に乗れるようになって、家の周りはいいいよって言うんですけど、やっぱ道路に出たがるのですよ。1 回出ちゃったのかな。あって、ちょっと、怒ったんですけど。／

このように、気づきが深まり、関わり方の変化にいたる場合もあるが、気づきがあっても意識変容が起こらない場合もある。

筆者：(懇親会で) 他の人がしゃべっていたことは (覚えてますか) ？

B 春：覚えていないというか (間)、俺が思っているレベルになってほしいな。

筆者：おれについてこい？ (という感じですか)

B春：そうそう、そうじゃないと話聞けないな。聞けないというわけではないけれど、頭には入ってこないな。そういうのもあるかなとは思っても。／

上記の最後に「そういうのはあるかなとは思っても。」と語っているように、人の意見は聞きながらも変わらない意識のままである。このように変容が起こらないのは子育てパパの誇りなどの父親の中で子育て観が確立していることが一因ではないかと考えられる。

また、子育て観が変化し始めることがあったとしても、子どもへの関わりの変化までいらないケースもある。

A春：（一人っ子の親の接し方は）ゆとりがあって。あっ、「じっくり育てられていいな」みたいな。

（中略）

筆者：Aさんとしては「じゃあ真似しよう」とか「そういう風にやってみよう」というのは？

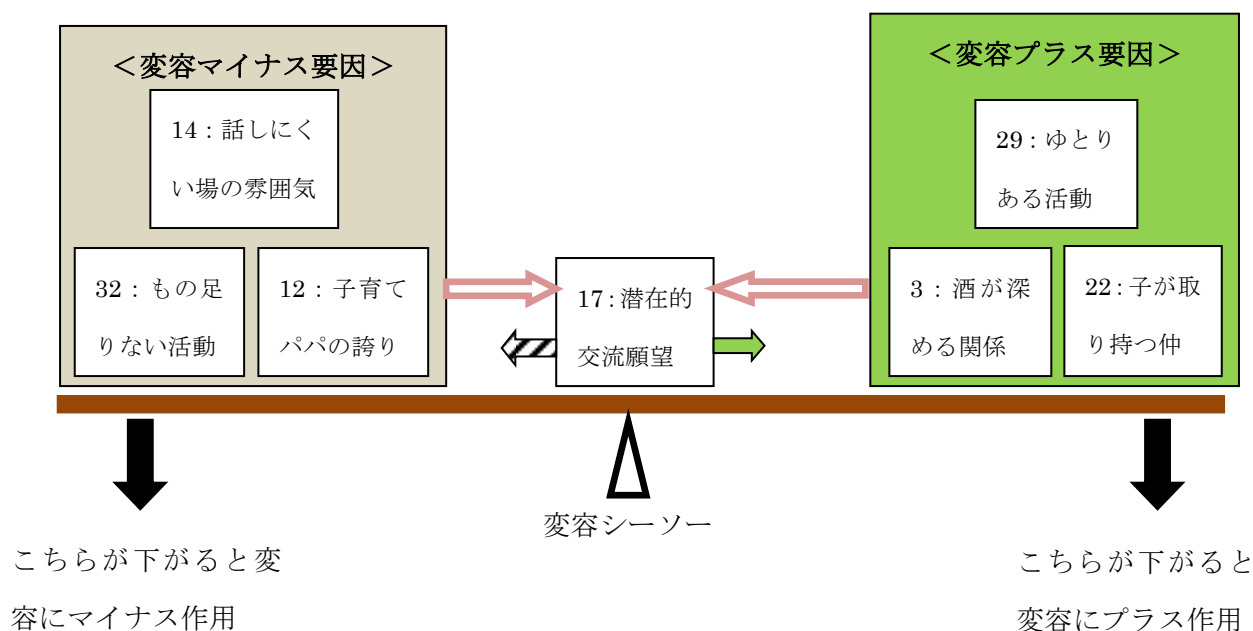
A春：思わないですよ。はい。／

Aさんは子どもが3人おり、ひとりっ子の親の接し方を見て影響を受けているが、自分の環境に置き換えた場合、それはそうだが難しいと感じ、行動変容までは至らなかった。このような気づきに変容にいたる場合と変容しない場合を比較すると、プログラム内での気づきの数と質、個人の子育てに対する思い込みの強さ、家族環境が変容に影響していることが考えられる。

このことをふまえると、実際の社会教育のアプローチとしては、豊かな気づきをプログラム内で、いかに促すかが焦点になるだろう。また、質の高い、インパクトある気づきは、子育てに対する思い込みの強さにも影響を与えることもあるだろう。

では、どのようにすれば、気づきを促すことができるのだろうか。このことは、男性特有の意識やプログラムの構成が関わっており、この点を含めて、次の5)で述べたいと思う。

5) <変容プラス要因>、<変容マイナス要因>について



変容の可能性を高めるには、いかにして父親に気づきを促すかが重要である。それには、男性特有の潜在的交流願望を理解し、その願望に働きかけるプログラムをデザインすること重要である。

この潜在的交流願望は、本心では他の父親と交流したいと思いながらも、実際の交流に消極的な父親の行動の背景にある気持ちである。伊藤（1996）によると、男性は自分の気持ちを相手に率直に伝えるというコミュニケーションが欠落していると指摘している。⁵⁵⁾

B春：俺、朝飯をすごく食う人なんで、だからみんなが食わないから少し恥ずかしいと思った。昼は食わないで朝晩すごく食うので、だから、そんなに食ったら恥ずかしいなという思いはあった。みんなが遠慮しているから。子どもの茶碗みたいのだったから、そうなんか、ほんとみんな遠慮して食ってるのかなと……。だから、逆にみんながみんな、ちゃんと打ち解けてなかったのかなと、逆に。俺構わずお代わりしていたから、「え、そんなに食うんですか！」みたいな。それで話がはずむみたいな。

1回目のキャンプでは時間にゆとりを持たせ、父親同士の交流を持てるようにしたが、思ったよりコミュニケーションは取られなかった。そこで2回目のキャンプでは2日目の

野外調理において各班で調理内容を相談して決めるというプログラムを組んだところ会話が交わされるようになった。

筆者：（野外調理のメニューを決める時に）相談されて“あれやろう”“これやろう”っていう感じだったんですかね？

A春：そうですね、まあ、“自分が米で、Bさんがカレーを見る”と。／

このように、父親は交流するための「理由」がないと、積極的に交流しないようである。父親には良い意味で“話をせざるを得ない状況”を作り出すことが必要で、プログラムデザインの核になると考えられる。

また、酒が深める関係については、酒を飲むことで、自分自身の本音を語りやすくなり、父親同士の関係が深まることが明らかになった。

B春：そう、普通に気兼ねなくというか、挨拶するのがめんどくさいなっていうことあるじゃないですか？（地元のスーパーで）あ、いるなと思って。この間の人達（キャンプの参加者）の場合は、こちらから、『あ、どうも』っていう気持ちになるっていうか。やっぱ、あれですよ、夜飲みながら、ああいう風に話をするのもちよつと、ああいうのは良かったな。」／

A春：ちょっと位、やっぱ飲んだ方が、喋りやすいかなあ？ていうのはありますよね。／

このように、酒を飲むことで心がほぐれ、本音が語りやすくなることは、潜在的交流願望により進まなかった関係を構築する効果があるだろう。これまで教育効果を上げるために酒の役割はあまり語られない。しかし、ラディカルな性質の社会教育では、プログラムの目標を達成のために手段として活用しても良いのではないか。ただし、飲みすぎることと言動が行き過ぎて、かえって人間関係を悪くするなど、酒類の提供は諸刃の刃であることを認識し、提供の際には細心の注意を払わなくてはならない。

さらに、子を取り持つ仲とは、子ども同士が仲良くなると、その父親同士も仲良くなることである。

筆者：お子さん同士が結構仲良くなると、こう、AさんとEさんのお父さん同士っていうのも、なんて言うんですかね、あの、お話をされるようになったとか(ありますか)。

A夏：そうですね、やっぱ子どもが、きっかけっていうのはありますよね。

2回目のキャンプにおいて、AさんとEさんの子どもが、2日目の朝から急に仲良くなった。そのため、朝の親子体操を終えてから、本館まで移動する途中で子ども同士が手をつなぎ、それぞれの子どもと父親が手をつないで移動している光景が見られた。

つまり、子ども同士が仲良くなるプログラムや配慮は、父親同士の関わり増やすことになり、その結果、父親の変容に影響をもたらす可能性がある。

ゆとりある活動については、プログラムを2日間で、野外調理が1回、野外活動が1回(カヌーもしくは川遊び)とプログラム数少なくしたことで実現できた。

D夏：至れり尽くせりだったから、こんな楽しくて良かったのかな？(中略) 自炊した片付けも(やらなくて)いいのかなって。あ、でも、逆にあそこまでの片付けがあっても良いかなと思うんですけど。片付けも子どもと一緒にやるのも良かったなと思うんですけど。

本キャンプは父親の子育て意識を高めることが目的である。そのため、子どもと向き合ったり、他の家族の様子を見るには父親に精神的、時間的なゆとりが必要であると考えた。活動があわただしく、疲れ果て子どもに関心が向かないようでは本末転倒である。もちろん、部分的な体験活動⁵⁶⁾は教育効果が低いと考えられるが、逆に何もかもを丸ごと体験することは様々な制約により現実的ではなく、本来の目的から離れた活動になる危険性を秘めている。つまり、もの足りない活動になるか、ゆとりある活動になるかは紙一重であり、参加者の状態やスキルや経験により異なるので、バランスを取ることが求められる。

また、<変容マイナス要因>としては話しにくい場の雰囲気があり、プログラム作成上の注意点となる。

1回目のキャンプの子育てをテーマにした懇親会で、席は離れていたがCさんの妻が同じ部屋にいたこと、また途中で父親グループと母親グループで意見を交換することがあった。Cさんは、そのことを負担に感じ会話に積極的に参加できなかった。

C春：うちだけですからね奥さんがいるのは。あれ（女性グループの意見）はどう考えてもうちですよね。口数は減りますよね。／

さらにこの時のテーマが「なぜ日本の父親は子育てをする時間が短いのか？」という父親自身を否定するようなテーマ設定にしてしまったことも反省材料となった。カナダの親教育プログラムの「Nobody's Perfect」でも基本的な考え方として、価値観を変えるためのプログラムではなく、自分の価値観に気づき、価値観を意識的に考え、視野を広げ、価値観について問い直したり、価値観を拡大したり、肯定したりする機会を提供している。⁵⁷⁾ もともと、交流することが難しい父親だけに、懇親会の環境設定や話題設定は十分な配慮が必要である。

子育てパパの誇りは変容に対して阻害要因にもなる。これは子育てを頑張っているからこそ生まれる誇りであるが、同時に子育て観が固定化しており、プログラムの影響が受けにくいようである。社会教育の参加者と主催者の関係は、サークルの会員とは違い、一期一会の関係であり、時間をかけて、お互いに関係を深めながら変容していくことは基本的にできない。今回のキャンプでは野外調理の進行を海賊に扮したスタッフが行った。そのことで、会場の雰囲気盛り上げ、交流をしやすい雰囲気作りには大いに効果があった。短期間で変容に効果的なプログラムを行う意味で、このようなインパクトの強く、日常の環境では行いにくい要素を加えていくことについて、今後、思考錯誤していく余地はありそうだ。

これまで述べてきたように変容へ及ぼすには、いかにして潜在的交流願望に対してアプローチするかがテーマであると考えられる。プログラムデザインの際にはこれらの要素を効果的に使い、先に示した「変容シーソー」をプラス側へ傾けることが大切なのである。

V 結論

1. まとめ

本研究では、父親の子育て参加意識を高める社会教育プログラムの、諸要因を明らかにしようと試みた。そのために、父子キャンプに参加した父親の、参加申込時から活動が終了した1ヵ月後までの、意識の変容プロセスをM-G T Aで明らかにした。その結果、父親の意識・行動変容を促すには、男性特有の2つの意識を理解した上で、参加者の募集や活動プログラムをデザインすることの必要性が示唆された。

1つ目の意識は、参加決定過程時における、埋め合わせ願望からの参加意向である。これは父親が日常生活で「子育てに関われていない」ことに対する罪悪感である。

E 夏：普段、自分がどこも連れて行ってあげられない、時間の関係で。妻の方で結構、買い物とかなんですけど、「どこ、どこ行ったよ」って話を聞くと、自分には行っていないのかなってというのが強くて。

このような後ろめたいと感じる気持ちが参加決定に対して大きく影響している。そのプロセスは、普段、仕事で子どもと関わる時間が少ない父親は、キャンプが子どもと接する良い機会であると感じ、埋め合わせ願望からの参加意向を強める。同時に子どもに対して参加意向を確認し、子どもが参加したいと思うことで、参加が決定するという＜父主体参加決定過程＞である。

このことから、父子を対象とする活動の募集時には、子どものために何かをしてあげたいという気持ちに訴えるような募集方法が有効であると考えられる。具体的には、募集チラシに「子どもと一緒に時間が取れていないお父さんにオススメ企画！」のようなキャッチコピーを入れることが考えられる。また、夏休み直後に募集をかけて、「夏休みにどこにも出かけられなかった」と父親が気にかけているタイミングで募集を行うなどの応用ができると考えている。

2つ目の意識は、変容過程時における、潜在的交流願望である。これは、本当は他の父親と交流を持ちたいと考えているが、自ら積極的に他の父親とコミュニケーションを取ろうとしない父親の心の中の想いである。

本研究では、本当は心の中で交流したいと思いながらも、積極的にコミュニケーション

を取らない父親の姿が確認された。また、本研究＜内的思考変容過程＞では、他の父親の話し内容や他の父子が接している姿を見ることで、気づきや変容が起こることが明らかになった。つまり、いかに、父親同士を交流させることができるかが、プログラムの核心である。

このことから、父親の変容を促すプログラムデザインのためには、交流を阻害している潜在的交流願望を、実際の交流にシフトさせるような働きかけや学習環境を、＜変容プラス要因＞と＜変容マイナス要因＞を基に、プログラムデザインすることが重要である。この、＜変容プラス要因＞には、ゆとりある活動、酒が深める関係、子を取り持つ仲が影響していた。また阻害する要因として＜変容マイナス要因＞である、子育てパパの誇り、話しにくい場の雰囲気、もの足りない活動が影響していた。

1回目のキャンプでは時間にゆとりを持たせ、父親同士の交流を持てるようにしたが、思ったよりコミュニケーションは取られなかった。そこで2回目のキャンプでは2日目の野外調理において、各班で調理内容を相談して決めるというプログラムを組んだところ、会話が交わされるようになった。このように、父親は交流するための「理由」がないと、積極的に交流しないようである。父親には良い意味で“話をせざるを得ない状況”を作り出すことが必要で、プログラムデザインのキーポイントになると考えられる。

2. 今後の展望

今回の研究では長期的な意識や行動の変容の分析はできなかった。しかし、現実的に実施できる期間で、効果と限界を検証できたことは、実践で応用する上で意義があったと考えている。

また、本研究の結果を社会教育現場で活用ができるように「父子キャンプにおける父親の子育て学習ガイド」（p 56）と「プログラムモデル」（p 57～58）を作成した。このガイドは筆者の在住している近隣の市町村の社会教育施設に配布する予定である。配布されたガイドを社会教育実践者が活用して、その結果を筆者にフィードバックしてもらうように考えている。今後、実践者と筆者のやり取りを通じて、本研究の成果の検証と修正を行っていききたい。

M-G-T-Aの分析結果は実践的活用のための理論である。今後は実践者と協力しながら、成果を検証・修正していくことで、最終的にはより詳細なプログラムデザインのためのガイドの作成をしたいと考えている。

謝辞

本論文の執筆にあたり、インタビュー調査に協力くださったお父様方、野外活動全般のご助言をいただきました埼玉県立名栗げんきプラザの職員の方々、キャンプのボランティアスタッフの方々、そして、大学院で学ぶことにご理解をいただいた勤務先である川島町役場、および同僚の方々に心から感謝申し上げます。

引用文献・注

- 1) 宮坂靖子「ジェンダー研究と親イメージの変容」『家族社会学研究』1999, 11, p 42-43
- 2) 石井クンツ昌子「米国における父親研究の動向」『家族社会学研究』1998, 10(2), p 138-139
- 3) 牧野カツコ、中西雪夫「乳幼児をもつ母親の育児不安－父親の生活および意識との関連－」『家庭教育研究所紀要』1985, 6, p 11-24
- 4) 伊藤公男『男性学入門』作品社, 1996, p 304
- 5) 柏木恵子『父親の発達心理学－父性の現在とその周辺－』川島書房, 1993, p 333-341
- 6) 落合恵美子『21 世紀家族へ』有斐閣, 1994, p 98-103
- 7) 総務省統計局「社会生活基本調査」2008
- 8) 国立女性教育会館「家庭教育に関する国際比較調査」2005, p 71
- 9) 松田茂樹『何が育児を支えるのか』勁草書房, 2008, p 40-41
- 10) 9) と同じ
- 11) 宮坂靖子「育児の歴史－父親・母親をめぐる育児戦略－」大和礼子ほか編『男の育児・女の育児－家族社会学からのアプローチ』昭和堂 2008, p 41
- 12) 国立女性教育会館「家庭教育に関する国際比較調査」2005, p 27、p 230－231
- 13) 吉武弘喜「生涯学習と社会教育」山本恒夫ほか編『生涯学習論』文憲堂, 2007, p 24
- 14) 文部科学省「社会教育基本調査」2005
- 15) 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター「平成 14 年度社会教育地域実態調査」2002

- 16) 岡本薫「日本型生涯学習支援論」鈴木真理他編『生涯学習と社会教育』学文社, 2003,
p 166
- 17) 山本恒夫「生涯学習の定義と意義」山本恒夫ほか編『生涯学習論』文憲堂, 2007,
p 5
- 18) 柏木恵子「子ども・育児による親の発達」牧野カツコほか編『子どもの発達と父親
の役割』ミネルヴァ書房, 1996, p 59
- 19) 山根真理「育児不安と家族の危機」清水新二編『家族問題』ミネルヴァ書房, 2000,
p 23-24
- 20) 牧野カツコ「乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要』1982,
3, p 34-56
- 21) 山根真理「育児不安と家族の危機」清水新二編『家族問題』ミネルヴァ書房, 2000,
p 30
- 22) 柏木恵子『父親の発達心理学—父性の現在とその周辺—』川島書房, 1993, p 1
- 23) 中野由美子「はじめの3年間の子どもの発達と父子関係」牧野カツコほか編『子ど
もの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房, 1996, p 38
- 24) 大和礼子「“世話／しつけ／遊ぶ”父と“母親だけでない自分”を求める母」大
和礼子ほか編『男の育児・女の育児』2008, p 1-24)
- 25) 牧野暢男「父親にとっての子育て体験の意味」牧野カツコほか編『子どもの発達と
父親の役割』ミネルヴァ書房, 1996, p 53-57
- 26) 中野由美子「はじめの3年間の子どもの発達と父子関係」牧野カツコほか編『子ど
もの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房, 1996, p 36
- 27) 小野寺敦子「日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究」『心理学研究』1993,
64(2), p 147-152
- 28) 加藤邦子ほか「父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす
影響: 社会的な背景の異なる2つのコーホート比較から」『発達心理学研究』2002,
13(1), p 37
- 29) Ishii-Kuntz,M 「Father's involvement and children's social network:A
comparison between Japan and the United States」『家庭教育研究紀要』1998,
20, 5-16
- 30) 24)と同じ

- 31) 牧野カツコ「乳幼児を持つ母親の生活と＜育児不安＞」『家庭教育研究所紀要』1982, 3, p 34-56
- 32) 岩田美香『現代社会の育児不安』家政教育社, 2000, p 14-24
- 33) 牧野カツコほか「乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識の関連—」『家庭教育研究所紀要』1985, 6, p 11-24
- 34) 常葉（布施）美穂「変容的学習—J・メジローの理論をめぐって」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社, 2004, p 87
- 35) 常葉（布施）美穂「変容的学習—J・メジローの理論をめぐって」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社, 2004, p 88-89
- 36) 常葉（布施）美穂「変容的学習—J・メジローの理論をめぐって」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社, 2004, p 89
- 37) パトリシア・A・克蘭トン, 入江直子ほか訳『おとなの学びを拓く—自己決定と意識変容をめざして—』鳳書房, 1999, p 205
- 38) 永井健夫「意識変容としての成人の学習—J・Mezirow の学習論の検討」『東京大学教育学部紀要』1989, 29 など
- 39) 宮坂広作『生涯学習の理論』明石書店, 1990, p 27
- 40) 吉岡亜希子「父親の子育てグループ学習における学習過程と意識変容」『社会教育研究』2006, 24, p 11-23,
- 41) 吉岡亜希子「子育て講座における父親の学習過程と意識変容 : さっぽろ子育てネットワークの取り組みを事例に」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』2009, 107, p 179-193
- 42) 榎ひとみ「子育て問題学習実践における親の学習過程と意識変容」『社会教育研究』2007, 25, p 9-23
- 43) 榎ひとみ「子育て問題学習における省察的自己教育課程: 省察の媒介物としての鏡 (mirror) に着目して」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』2007, 103, p 163-178
- 44) 堀薫夫「生涯学習社会の学習論」鈴木真理他編『生涯学習と社会教育』学文社, 2003, p 109-110
- 45) 宮坂広作『生涯学習と主体形成』明石書店, 1992, p 54)

- 46) 筆者の経験として、社会教育現場の職員は実際には日常業務に忙殺されており、アカデミックな文献を読んでいる余裕はなかなか無い、理解し実践に応用しようにも時間がかかりすぎて効率的でないと感じている。
- 47) 矢富直美ほか『「地域型認知症予防プログラム」実践ガイド』中央法規出版，2008
- 48) パトリシア・A・クラントン，入江直子ほか訳『おとなの学びを拓く－自己決定と意識変容をめざして－』鳳書房，1999， p 204
- 49) 常葉（布施）美穂「変容的学習－J・メジローの理論をめぐる」赤尾勝己編『生涯学習理論を学ぶ人のために』世界思想社，2004， p 92
- 50) 入江直子ほか『協働の時代の学びと実践－学習支援ハンドブック』日本女性学習財団，2006， p 51
- 51) 木下康仁「ライブ講義M－G T A　－実践的質的研究法－」弘文堂，2007， p 69
- 52) 文部科学省答申「家庭の教育力の充実等のための社会教育行政の体制整備について」，2004
- 53) 国立女性教育会館「家庭教育に関する国際比較調査」2005， p 205
- 54) 文部科学省答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興」，2004
- 55) 伊藤公男『男性学入門』作品社，1996， p 114
- 56) 例えば、いちごの苗を畑に植えるところから始めて、苗が成長するように世話をし、自分の手で収穫し、いちごジャムを作る方が、いちごの生長のしくみ、農業者の苦勞、食べ物への感謝の気持ちが育まれて教育効果が高いと考えられる。しかし、主催者が購入したいちごでジャムを作るだけの単発の講座では、このような学びを深めることは困難である。
- 57) Janice Wood Catano，三沢直子監修，杉田真ほか訳『親教育プログラムのすすめ方～ファシリテーターの仕事～』ひとなる書房，2002， p 24・25

参考文献

- ・岡本包治ほか「生涯学習研究の課題を問う」『日本生涯教育学会年報』1999， 20
- ・鈴木真理ほか編『生涯学習をとりまく社会環境』学文社，2003
- ・鈴木真理ほか編『生涯学習の原理的諸問題』学文社，2003
- ・パトリシア・A・クラントン，入江直子ほか訳『おとなの学びを創る－専門職の省察的实践をめざして－』鳳書房，2008

- ・ 汐見稔幸ほか『次世代育成と公民館』独立行政法人 国立女性教育会館，2004
- ・ 角替弘志ほか『参加体験型学習－ハンドブック』国立教育政策研究所社会教育実践研究センター，2009
- ・ 白石克己ほか『学習プログラムの革新－学習者がつくる学びの世界－』ぎょうせい，2001
- ・ 鈴木真理『学ばないこと・学ぶことーとまれ・生涯学習の・ススめ』学文社，2006
- ・ チャールズ・A・ラップほか，田中英樹ほか訳『ストレングスモデル』金剛出版，2008
- ・ ジャニウス・ウッド・キャノタ，杉田真ほか訳『親教育プログラムの進め方～ファシリテーターの仕事～』ひとなる書房，2002
- ・ 松本千明『医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎－生活習慣病を中心に』医歯薬出版，2002
- ・ 落合恵美子『21 世紀家族へ』有斐閣 1994，
- ・ 大日向正美『母性神話とのたたかい』草土文化，2002
- ・ 石井クンツ昌子『学力とトランジションの危機』金子書房，2007
- ・ ポープ，キャサリン・メイズ，ニコラス『質的研究実践ガイドー保健・医療サービス向上のために』医学書院，2008
- ・ 鈴木淳子『調査的面接の技法』ナカニシヤ出版，2002
- ・ 秋田喜代美ほか『はじめての質的研究法－教育・学習』東京図書，2007
- ・ 木下康仁『質的研究と記述の厚み－M－G T A・事例・エスノグラフィー』弘文堂，2009
- ・ 中野由美子「3 歳児の発達と父子関係」『家庭教育研究所紀要』1992，14，124-129
- ・ 土谷みち子「父親の生活実態と父子のかかわりについて」『家庭教育研究所紀要』1992，14，108-116
- ・ 土谷みち子「父親の養育行動の柔軟性と子どもの発達」『家庭教育研究所紀要』1994，16，101-110
- ・ 青木聡子ほか「幼児を持つ父親の育児参加を促す要因：父母比較による検討」『東京学芸大学紀要』2005，56，79-85
- ・ 冬木春子「少子化対策における『父親支援策』－自治体による『父親教室』に着目して－」『静岡大学教育学部研究報告』2007，57，91-106
- ・ 文部科学省答申「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について」，1992

- ・文部科学省答申「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」，2007

「父子キャンプにおける父親の子育て学習ガイド」

「参加率UP」の工夫

<参加の4要素>

- ①父親の子育てに参加でき
ていない理め合わせ願望
- ②母親の参加させてみたい気持ち
- ③子どもの参加意欲
- ④父親の参加意欲

子育てに関心が高い親へのアプローチ

子どもと過ごす時間が少ないと悩み、子どもと
過ごす機会が欲しいという気持ちがある。そこで
父親の埋め合わせ願望に訴える募集媒体を作成。
例：「仕事で忙しいお父さん、お子様と夏休み最
後の思い出をキャンプで作りますか？」

子育てに関心が低い親へのアプローチ

一般的に参加する可能性は低い。そこで、母親と一緒に参加できる
キャンプにするか、母親が参加させてみたい気持ちになるようにし
て、父親の参加を母親から促す。
例：男の子でも女の子でも参加しやすい表現を「木の葉を使ったアク
セサリー作り」→女の子には良いが男の子の参加には逆効果。改善例
「木の葉を使った工作」

参 加 率 U P

「効果的なプログラム」の戦略

父子の濃密な関わりに配慮する

父親が子どもと一緒に生活することで、父
子の絆が強まる。しかし、母親が参加して
いる場合には、家庭の延長になる可能性が
高いので注意が必要である。そのためには
以下のことが大切になる。

- ①父子の関わりを深めるには、ゆとりある
プログラムとする。活動と活動の間の時間
も関わりを深める効果がある。
- ②仮に母親が参加している場合は父子と母
親が別々のプログラムに参加する。募集時
にキャンプの主旨は父子キャンプであるこ
とは明記しておく必要がある。

父親同士の交流の場を作る

他の父親の発言を聞くことや、他の父子の関
わりからヒントを得て、子育て意識や子ども
との関わり方が変化する。そのため、父親同
士が交流し、話し合う場を作ることが効果的
である。

- ①子育てに関する座談会を開催する。父親自
身の子育て観を再認識すること、他の父親の
考えを知ることが大切である。主催者側が父
親の意識を変えようと、父親の子育て方法を
批判したり、指導するのは逆効果である。
- ②この座談会は適量の酒類の提供が父親の本
音を引き出し効果をあげる場合がある。しか
し、逆に雰囲気重くしたりする可能性もあ
るので注意が必要である。

交流を後押しする

父親は行動には出にくい。他の父親と交流
したいという気持ちを持っている。しかしな
がら、自然に父親同士が積極的に交流し合う
可能性は低いので、プログラムで後押しする。

- ①例えば野外調理のメニューを話し合いで決
めるようにして、話さざるを得ないプログラ
ムにすると交流のきっかけになる。しかし、
心理的な負担も少なくないので、ある程度、
雰囲気は壊れてきてから行うなどタイミ
ングを考慮する必要がある。
- ②子どもが仲良くなるとその父親同士が仲良
くなることもある。子どもが仲良くなるのは
プログラム中だけでなく、一緒にハンガロー
に寝る、風呂に入る、おしゃべりをするなど、
大人の感覚とはズれている場合がある。

子 育 て 参 加 へ

これは修正論文「父親の子育て参加意識を高める社会教育プログラムの考察」(聖学院大学大学院 人間科学研究科)の結果をもとに作成したものです。父子キャンプ以外にも男性の成人教育分野でもある程度は応用できると考えています。また、この考察以外にも効果を高める要因が他にもあったり、現場で応用するには不十分なところがあるかと思えます。この結果はその意味では途中経過であり、今後、社会教育現場で検証をされている方に活用していただき内容を精査していく必要のあるものです。ぜひ、興味のある方は本結果をご利用いただき、ご意見、ご感想をいただければ幸いです。 (連絡先) 神田雅貴 kandamasaki1972@gmail.com

プログラムモデル：父子キャンプ「おさかな気分で川遊びと魚釣り」（〇月〇～〇日）進行表

ねらい	目的：父親を対象とした子育て参加意識を高めるための父子キャンプ				
	1. 他の親子の関わりを見ることで自身の子育て観のふりかえりを促す。 2. 母親がいない環境で、父親が子どもと関わることで父親自身の子育て観をふり返りを促す。 3. 家庭で再現できる遊びを提供することで、キャンプ後の行動変容を促す				
スタッフ	全体進行（以降Dと表記）：1名／プログラム責任者（PD）：1名／班リーダー（R）2名（PDが兼務）／サブリーダー（S）2名※2班編成				
参加者	10家族 20名（父親、子ども：幼児もしくは小学校低学年）				

1日目

時間	内容	場所	担当	ねらい	備考
9:50	受付		S		
10:00	はじめの集い ・あいさつ（D）・スタッフ紹介	活動に適した場所	PD		
10:10	アイスブレイク ・自己紹介・約束の説明・ゲーム	活動に適した場所	R	自己紹介を兼ねるアイスブレイクゲームで緊張を解きほぐす	ここで、子どもに気を付けてほしいことを「約束」として、説明する。
10:40	A川遊び Bカヌー Cハイキング D雪遊び E工作 その他 （季節に応じた活動）	活動に適した場所	PD	いきなり父親同士を交流させるのではなく、始めは親子活動から入り、キャンプの雰囲気になれるのを待つ。	実際の活動は季節に応じたもの、活動拠点に応じたもの。社会教育施設を利用する場合、その施設に応じた活動内容の助言を受けることができる。
12:00	お弁当	活動に適した場所	M	食事は交流を深めるチャンスなので、参加者がバラバラにならないよう、お互い話ができる場所をセッティングする。	余裕をもった活動を実現するには、野外調理は1泊2日で、1回くらいが適当。
13:00	午前の活動の続き	活動に適した場所	PD	ここから家族単位の交流を組み込む。グループ分けして活動するのも1つの方法。	複数家族で協力をして出来る活動を少しずつ組み込む。この時点では父親の負担を考慮して、あくまでも軽い関わりとする。
15:00	終了	活動に適した場所	PD	撤収開始	
15:30	宿泊施設着	バンガロー	PD		部屋表示、シーツ受領、以降自由時間
15:45	自由時間		R/M	慣れない環境での活動のため、疲れを考慮して休憩時間として設定。何もしない時間があっても良い。	子どもが元気ならば、スタッフと遊び、父子を分離させて、父親同士の交流をはかるのも1つの考え方。
17:30	夕食	食堂	全員	食事・入浴は父親と子どもを分離して、父親同士の交流をはかるか、父子一緒にして、他の親子の関わりを見られるようにするかのどちらかを選択してする。	本キャンプの目的を考えると食事や入浴の時間は大切。すべての場面において、学びが深まる可能性を秘めていることに注意して、活動を考える。
19:00	入浴	浴室	全員	同上	同上

20:00	懇談会（大人）	バンガロー	懇親会：PD 準備：M	父親の子育てについて話し合う。出来るだけ活発な会話が交わされることが、学びを深めることになるので、そのための場の環境や進行方法に配慮する。	①他の団体や妻が近くに居ることはNGで集中して話ができる環境を設定する。（子どもはスタッフが面倒をみる）②父親の立場を否定するような進行はNG。
21:30	懇談会終了	バンガロー			21:45には親が子どものもとに戻れるように配慮。また、子どもが寝ていれば懇親会を続行するのも良い。
22:00	就寝	バンガロー	全員		親子で一緒に寝る。
23:00	スタッフミーティング	バンガロー	D/PD/R		
23:30	スタッフ就寝	バンガロー	全員		

2日目

時間	内容	場所	担当	ねらい	備考
6:00	起床 ・着替え ・寝具片付	バンガロー	全員		
6:45	朝のつどい A 散歩 B 親子体操 C ラジオ体操 D 日の出見学 (施設や季節に応じたもの)	活動に適した場所	R	自宅でも父子できる活動を体験することで、帰宅後の行動変容を促す。	
7:30	朝食	食堂	全員		
9:00	チェックアウト	バンガロー	全員		
9:10	A メニューを父親同士で自由に決められる調理。 B 子どもに野菜や魚をさばくなど課題を与える調理。 C 各班で別々の調理を作り、PR合戦をしてどの料理が人気があるか競う調理。	野外炊事場	R	調理メニューを班ごとに自由に決めるなど、話をせざるを得ないプログラムとして、父親同士の交流をはかる。また、包丁で野菜を切るなど、子どもだけでは難しい内容の課題を与え父子の関わり合いをもたせる。	キャンプ中で最も負荷のかかる活動を行う。他の父親が子どもと関わる様子を見ることで気づきを促す。話し合う時間を設けるのも大切。
12:00	昼食	野外炊事場	全員		
13:00	ふりかえりの会 ・グループふりかえりの後、全体でふりかえりを行う。	食事広場	PD	キャンプの当初のねらいについて、どの程度達成できたか質問する。グループは最大6家族までとして、各グループにファシリテーターを配置する。グループで話し合った内容を発表することで、全体でふりかえりをする。	子どもはスタッフが預かった方が、落ち着いてふりかえりができる。ふりかえりはさらなる気づきを促す効果がある。
13:20	終わりのつどい	食事広場	PD		
13:30	解散		全員		

聖学院大学大学院
人間福祉学研究科（修士課程）

学籍番号 108MW002 名前 神田雅貴